

---

# 風都国立大学付属高等学校（仮）

奇跡的な人間

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風都国立大学付属高等学校（仮）

### 【Nコード】

N2575X

### 【作者名】

奇跡的な人間

### 【あらすじ】

仮面ライダーやさまざまなアニメが混合・融合した世界。もちろん、この世界も独立した世界であり、それぞれの世界の人物もいれば、この世界にしかない人物もいる。現在、仮面ライダーキバ、仮面ライダーW、仮面ライダーアギト、バカとテストと召喚獣が混合・融合しています。

## 舞台・用語（前書き）

タイトルは仮なので、この小説をお読みなってくれた方は、いいタイトルを感想に書いて教えてください。

## 舞台・用語

舞台

風都ふうと

本作品の舞台となる、仮面ライダーWの世界にも存在した架空の都市。

街の至るところに様々な形状の風車が回る、通称「エコの街」。「ふうとくん」という街のマスコットキャラクターが人気者である。この町の名物は、普通のラーメン屋の屋台で売っている、巨大なナルトが特徴的な風麺。

自称・ハードボイルド探偵の翔太郎を始め、多くの住民に愛されている一方、裏ではミュージアムやそのほかの悪の組織・怪人が暗躍するための活動拠点のような都市として、暗黒的な側面も持っており、近年ガイアメモリによる犯罪も増加している。

風都国立大学付属高等学校（ふうとこくりつだいがくふぞくこうとうがっこう）

主人公やメインキャラが通る高校。制服は決まっておらず、私服のものや、学生服、ブレザーを着ている人など服装が適当な学校。学校の電気は全て風力発電。ガイアメモリを所有する人もいれば、怪人がいる、奇妙な学校。反面、都市伝説の仮面ライダーがいるという噂がある学校。左翔太郎も通っていたらしい。

風都国立大学付属中学校（ふうとこくりつだいがくふぞくこうとうがっこう）

風都国立大学付属の中学校。偏差値はそれなりに高い。

なるみたんていじむしょ

鳴海探偵事務所

自称・ハードボイルド探偵の左翔太郎が勤める（？）探偵事務所。

パツとみ中学生の鳴海亜樹子が所長を勤める。事務所の社員である左翔太郎とフィリップがこの町の都市伝説の仮面ライダーであることを知っている人はほんのわずか。

#### ガイアメモリ

USBメモリ型の生体感應端末。人をドーパントにしたり、仮面ライダーにしたりすることができる。

#### ドーパント

装着者が自分の肉体にガイアメモリ内の「地球の記憶」を挿入し、その記憶を宿した怪人となった姿。

#### 仮面ライダー

風都に現れる怪人をたおすバイクのりの戦士。今のところ判明しているのは仮面ライダーWのみ。これからも増える予定。

## 舞台・用語（後書き）

前述のとおり、タイトルは仮なので、この小説をお読みなっ  
てくれ  
た方は、いいタイトルをかn（ry

## キャラ設定（前書き）

キャラ設定キターーー！！（宇宙キターーー！！風に）

## キャラ設定

風都国立大学付属高等学校

### 登場確定陣

まつかぜしょうへい  
松風翔平「登場確定」

今作の主人公。この世界にしか存在しない人間。風都国立大学付属高等学校に通う生徒。クラスは2 - B。個性的な人間が多い学校の中では常識人。成績優秀で容姿も良く、友達思いの優しい性格のため、彼への信頼も厚く、友達も多かったためクラスの人気者。自分の通う学校の都市伝説を信じてはいなかったが、同じクラスのフィリップが仮面ライダーWに変身したのを見て以来、鳴海探偵事務所に通い始め、Wのサポートをするようになる。園咲若菜のファン。フィリップとは当初余り相手にされなかったが、自身も園咲若菜のファンということをフィリップが知ってから、良く園咲若菜のことにについてはしたりしている。如月弦太郎と城島ユウキとは幼馴染。

### フィリップ「登場確定」

仮面ライダーWの世界にもいた魔少年。風都国立大学付属高等学校に通う生徒。クラスは松風と同じ2 - B。鳴海探偵事務所の居候。仮面ライダーWに左翔太郎と共に変身する。Wの右側。フィリップという名前は本名ではない。記憶喪失。彼が学校へ行く理由は特になく、ただ探偵事務所の自称・所長の鳴海明子が行けといってるだけであって、本人は乗り気ではない。授業中や休み時間では真っ白な本を読んでいるため、周囲から不思議くと認識されている。時々昼寝をしているように見えるが、それは翔太郎とWに変身するとき意識が翔太郎に行くため、体は空になるからである。学校では怪しまれないため（すでに別の意味で怪しまれてるが）、翔太郎の弟を装い、「ひだりまさき左将暉」と名乗っている。しかし、クラスメイトからは



偽名ではなく、愛称のフィリップで呼ばれている。園咲若菜のファン。

クイーン「登場確定」

仮面ライダーWの世界でエリザベスとよく一緒にいた人。本名は「板野友美」。クラスは1 - A。趣味はカラオケで、エリザベスとよく一緒に行く。歌唱力はプロ並み。翔平に憧れを抱いている。

エリザベス「登場確定」

仮面ライダーWの世界でクイーンとよく一緒にいた人。本名は「河西智美」。クラスはクイーンと同じ1 - A。趣味はカラオケで、クイーンとよく一緒に行く。歌唱力はプロ並み。フィリップのファン。

くれないわたる  
紅渡「登場確定」

仮面ライダーキバの世界にもいたこの世アレルギーの患者。人間とファンガイアのハーフ。クラスは3 - A。この世界ではこの世アレルギーではない模様。

くれないまさお  
紅正夫「登場確定」

仮面ライダーキバの世界にもいた未来人。約20年後の未来から来た紅渡の息子。クラスは2 - B。翔平とは親友。

登場未定陣

きさらぎけんたろう  
如月弦太郎「登場未定」

仮面ライダーフォーゼの世界にもいたトラッシュ。風都国立大学付属高等学校の転校生。クラスは2 - B。転校初日、学校へ行く途中フィリップが一年生からラブレターをもらっているのを見ていて、フィリップが興味深いと無神経なことに腹を立て、フォーゼの第1話の賢吾とのやり取りみたいになった。リーゼントに短ラン・Tシ

ヤツ・ボンタンの学生服を着用。その格好はまるで一昔前の不良の格好。そして、教室に入ってきて、「この学校の生徒全員と友達になる」と宣言する。翔平や城島ユウキとは幼馴染。風都国立大学付属高等学校にはヒエラルギーが無いため、この世界ではトラッシュと呼ばれるはされない。

城島ユウキ（じょうじまゆうき）「登場未定」

仮面ライダーフォーゼの世界にもいた宇宙オタク。クラスは2 - B。翔平や弦太郎とは幼馴染。翔平を「翔くん（翔太郎が風都イレギュラーズから翔ちゃんといわれるため、こちらはくん付けになっている）」、弦太郎を「弦ちゃん」と呼ぶ。

乾巧（いぬいたくみ）「登場未定」

仮面ライダーファイズの世界でファイズとして戦っていたオルフェノク。クラスは3 - A。

園田真理（そのだまり）「登場未定」

仮面ライダーキバの現代編でクイーンの称号を手に入れた人にそっくりな人。クラスは1 - B。

風谷真魚（かざやまな）「登場未定」

仮面ライダー電王の世界にいたデンライナーでアルバイトをしている客室乗務員の人に似ている。クラスは2 - C。

泉比奈（いずみひな）「登場未定」

仮面ライダーオーズの世界にもいた怪力ブラコン。クラスは2 - B。

野上良太郎（のがみりょうたろう）「登場未定」

仮面ライダー電王の世界にもいた運勢最悪のシスコン。クラスは2

- B。

風都国立大学付属高等学校、教職員

上原千恵「登場未定」

翔平達のクラスの担任。数学担当。

木村京平「登場確定」

英語教師。生活指導主任教師。

風都国立大学付属中学校

天道樹花「登場未定」

仮面ライダーカブトの世界にもいた「天の道を往き、樹と花を慈しむ少女」。クラスは2 - C。兄がいる。野村静香とは友達。

野村 静香「登場未定」

仮面ライダーキバの世界にもいたドラムが得意なバイオリニスト。クラスは2 - C。天道樹花とは友達。バイオリンを習うために紅家によく出入りする。

鳴海探偵事務所

左翔太郎「登場確定」

仮面ライダーWの世界にいた人と同一人物のハーフボイルド。ソフト帽を愛用している。自称・ハードボイルドだが、中身はよくも悪

くもお人好しの三枚目であるため、周囲に人々からは、「ハーポイルド（半熱君）」と呼ばわりされている。しかし探偵術、護身術はそれなりに優秀であり、不測の展開では機転を利かせることも多く、探偵には向いている。風都では非常に幅広い交友関係と情報網を持つているため、街の人々からの信頼は厚い。仮面ライダーWでは、名前のとおり、左を担当。ビッグズナイトでは、師匠である鳴海壮吉からフィリップのことを、「ガイアメモリの悪事に利用されている高校生」と聞いていたため、フィリップを無理矢理高校に行かせるきっかけを作ってしまった。風都国立大学付属高等学校に通っていた。

フィリップ「登場確定」

『風都国立高等学校』を参照

なるみあきこ  
鳴海亜樹子「登場確定」

仮面ライダーWの世界にもいた、大阪育ちの人。鳴海探偵事務所の所長兼大家。20歳だが童顔で子供っぽい性格のため、初対面の人からは女子中学生だと思われる。「私、聞いてない！」が口癖。大阪育ちのためか、（スリッパを利用した）つつこみが得意。翔太郎からフィリップはもともと、「ガイアメモリの悪事に利用されている高校生」と聞き、高校生なら高校に行くべきと勝手にフィリップを学校に行かせた。

OTHER  
なごけいすけ  
名護啓介

仮面ライダーキバの世界でもイクサに変身していた御方。仮面ライダーイクサに変身する。即婚者。

## キャラ設定（後書き）

ちなみにこのキャラ設定は仮なので、変わったりもします。話が進むごとに更新するのでチェックしてください。

**第01話・Fの戦士／緑と黒の仮面ライダー（前書き）**

サブタイトルのように、今回Wが出てきます。

## 第01話・Fの戦士/緑と黒の仮面ライダー

俺には、信じていないものが二つある。ひとつは塾の先生の年。まあ、クラスの間みなも信じてはいないが。もうひとつは、都市伝説の仮面ライダー。仮面ライダー、俺の住む風都にたびたび現れ、怪人を倒し、バイクに乗って変える、仮面をつけた戦士。しかも、俺の通う風都国立大学付属高校には仮面ライダーがいるという噂。ただの都市伝説だと思っていた。なのに、まさか実際にクラスメイトが仮面ライダーに変身するのを見るとはな。

昨日、いつもどおり学校に行っただ。

木村「はい、stand-up!」

英語の先生は、いつもどおり英語で号令を始めた。

木村「はい・・・礼」

担任の木村は、いまだに英語で礼が言えない。

木村「everyone set down・・・出席をとる、城島」

先生が出席をとってる中、話しかけてくるやつがいた。友達の紅正夫だ。

正夫「ねえ翔平、今日カラオケいかない?」

翔平「んー、わりい。テストの予習しねーといけねーから無理だ。また今度な、」

正夫「ちえっ、翔平いねーと盛り上がらないんだよな、」

今思えば行つてりやよかったかな、カラオケ。別にテストって言うてもどうせ中学の応用問題だし。

木村「左、呼んだら返事しろ」

先生が話しかけているのに変わらず本を読んでいるやつがいる。左将暉、通称・フィリップだ。

フィリップ「ブツブツブツブツ・・・ほう、これは興味深い。」

木村「話を聞いているのか」

フィリップ「先生、あいにくあなたの興味のわからない授業を聞くほど、僕は暇じゃない、」

木村「なんだと!」

正夫「あゝあ、また始まった。」

翔平「あいつ、ホント何考えてるんだ?いつも真っ白な本読んでたり、たまに何かつぶやいたり、USBメモリいじっていたり、寝ていたり。」

このときまで、俺はあいつをただの変人だと思っていた。

事件は帰り道に起こった

帰り道、商店街を歩いていると空からいきなり針が落ちてきた。ギリギリあたりはしなかったが、あたっていたら体を貫いていただろう。

翔平「なんだ!?!」

とっさに空を見上げた。そこにはハチを思わせる怪人がいた(決して



てメ・バヂス・バではない」。

キャアアアアアアア！

周囲が驚いて逃げ回っている。

翔平「・・・怪物？」

ハチの怪人「ふん、次ははずさないぞ・・・松風翔平！」

翔平「えっ、何で俺の名前知って・・・」

ヒュン

また変な針が飛んできた。

翔平「うわ！なんなんだ、あいつ？」

翔太郎「あいつぁドーパントだ」

突然、背後から声が聞こえた。そこにはソフト帽をかぶった探偵風の人がいた。

翔平「あなたは？」

翔太郎「俺か？俺はハードボイルド探偵の・・・左しょうと・・・ぶほっ！」

亜樹子「何言つとるんじゃ半熱の癖に！あつ、私は、鳴海探偵事務所の美人所長、鳴海亜樹子ねっ！ちなみにこっちはハーフボイルド探偵の左翔太郎、」

翔平「はあ・・・」

翔太郎さんが格好をつけながら自己紹介をしているのを、亜樹子さんがスリッパを使って豪快に突っ込み、自己紹介を再度始めた。

フィリップ「そんなことより翔太郎、いくよ？」

翔平「えっ、フィリップ!？」

突如現れたクラスメイトにびっくりした。

翔太郎「おっ、フィリップのクラスメイトか、いやゝあいほ・・・じゃなくて弟が世話になっっているぜ。」

翔平「フィリップのお兄さんなんですか!？」

翔太郎「ん？あっ、ああ。それよりフィリップ、行くぜ」

そういうと翔太郎さんがダブルドライバーを腰に巻いて、それと同時にフィリップの腰にダブルドライバーが現れた。そして翔太郎さんは黒の、フィリップは緑の少し大きめのUSBメモリを出した。

ジョーカーメモリ（黒）「Joker!」

サイクロンメモリ（緑）「Cyclone!」

翔太郎・フィリップ「変身!」

変身と叫んだ後、フィリップはドライバーにサイクロンのUSBメモリをいれた。その直後、サイクロンメモリは翔太郎のドライバーに移動して、フィリップが倒れた。そしてそれを亜樹子さんが見事にキャッチした。そして翔太郎さんはもう一本のメモリ、ジョーカーメモリを入れた。

ダブルドライバー「Cyclone-Joker!」

翔太郎さんの体を風が包み、そこに現れたのは、右半分緑、左半分黒の戦士だった。

W・CJ「さあ、お前の罪を、数えろ！」

翔平「仮面・・・ライダー？」

俺は無意識にそうつぶやいていた。

## 第01話・Fの戦士／緑と黒の仮面ライダー（後書き）

蜂のドーパントはメ・バヂス・バではありませんが、姿はそっくりです。

**第02話 - Fの戦士／お前の罪を数えろ（前書き）**

第2話です

## 第02話・Fの戦士／お前の罪を数えろ

前回のあらすじ：

木村「左、呼んだら返事しろ」

フィリップ「・・・ほう、これは興味深い。」

木村「話を聞いているのか」

フィリップ「先生、あいにくあなたの興味のわからない授業を聞くほど、僕は暇じゃない、」

翔太郎「フィリップ、行くぜ」

ジョーカーメモリ（黒）「Joker!」

サイクロンメモリ（緑）「Cyclone!」

翔太郎・フィリップ「変身!」

ダブルドライバー「Cyclone・Joker!」

W・CJ「さあ、お前の罪を、数えろ!」

翔平「仮面・・・ライダー?」

俺は無意識にそうつぶやいていた。

\*\*\*\*\*

W・CJ「さあ、お前の罪を、数えろ！」

そういつてWはバトルを始めようとした。しかし、蜂のドーパントは舌打ちをしながら早々に帰っていった。

W・CJ「くそつ、あのヤロー、どこ行きやがった！」

そういつて翔太郎さんは変身をといた。それと同時にフィリップが起きた。

フィリップ「しかし、あのドーパントは君を襲っていた。となると、犯人は君に恨みを持っているものだね、」

翔平「お、おい。ち、ちょっと待ってくれないか！？」

話の内容が待ったくつかめないですが！？」

突然わけの分からない話をされて、質問せざるをえなかった。

翔太郎「ん、ああ、だったらうちの探偵事務所にこいよ。そこで話してやる。」

翔平「はあ・・・」

というわけで、

鳴海探偵事務所に来た。

そして秘密基地のような場所に入った。  
すげえな、ホワイトボードの数。

翔太郎「まず、あの怪人のことだけだな、あれはドーパントだ。」

翔平「どーぱんと？」

翔太郎「まず、こいつを見な、」

そういうと、翔太郎さんはパソコンに翔太郎さんやフィリップがWに変身するのに使ったUSBメモリに似たメモリの写真を出した。

翔太郎「こいつはガイアメモリってな。こいつは地球の記憶を内蔵していて、これを使って変身したのがドーパントだ。」

フィリップ「ちなみに、さっき検索した結果、さっきのドーパントのメモリの名前はビー、蜂の記憶を司っている。」

翔平「いや、普通に見ても蜂って感じしたけどな、それよりアイツなんで俺を襲ったんだ？」

フィリップ「普通に考えると装着者は君に恨みを持っているね。何か心当たりは？」

翔平「んーどうだろう、あっなんかわすれているよーな・・・あー！！」

時計を見た。あと少しで塾が始まる時間だった。

翔平「わりい塾いかねーと、じゃな！」

結局塾に遅れたが、自分に恨みを持つものは思いつかなかった。

そして現在に至る

俺に恨みを持つものねえ・・・ついかうちの高校に仮面ライダーが



いる噂って確かだったんだ。犯人見つかったら「園咲若菜のヒーリングプリンセス」の風都ミステリーツアーにはがき出そうかな、うちの高校に仮面ライダーいるって。

フィリップ「で、あれから思い当たる人見つけたかい？」

翔平「ん〜全く・・・あつ、ひとつ思い出した」

フィリップ「なんだい？」

翔平「いや〜実はさあ・・・中学のとき理科の先生が生徒にセクハラしてさあ、俺も好きな先生じゃなかったからさその先生のパソコンにハッキングしてあの人のばれるとやばいこと校長にメールしたんだよ。まあ、結局その先生の教育職員免許は処分されたらしいけど、」

フィリップ「なるほど、君のせいで人生が終わった。君に復讐するためにメモリを使った、か・・・なるほど、条件は完璧だね。後は居場所を検索する必要がある。」

翔平「えっ、どうやって・・・」

フィリップは地球の本棚に入り、犯人の検索を始めた。  
ほしのほんだな

フィリップ「キーワードは蜂、セクハラ、中学理科教師、そして・・・松風翔平」

そういうと、フィリップは真っ白な本を読み始めた。

フィリップ「なるほど、犯人の名前は港文也。みなとふみや彼の住むマンションは・・・」

バリイイイン！！

外から針が飛んできた。外には、ビードーパントがいた。

フィリップ「せっかく検索したのに、無駄になったな・・・」

翔太郎「仕方ねえだろ、フィリップ、」

翔平「翔太郎さん？どうしてここに！？」

翔太郎「ああ、それが。きっとドーパントはお前を襲うと思ってな、」

フィリップ「それよりいこう、翔太郎、」

翔太郎「ああ、フィリップ」

サイクロンメモリ「Cyclone！」

ジョーカーメモリ「Joker！」

翔太郎・フィリップ「「変身！」」

ダブルドライバー「Cyclone・Joker！」

翔太郎さんの体はたちまちWになり、フィリップは倒れた。

翔平「おっと」

W・C・J「ナイスキャッチだよ」「よっしゃ、行くぜ！」

W・CJ「さあ、お前の罪を数えろ！」

ビードーパント「またお前か！」

W・CJ「そこ、お前達、だよ」「だな！」

Wとビードーパントが戦い始めた。しかし、ビードーパントは空を飛べるためWは不利だった。

W・CJ「だったらこいつだ！」

トリガーメモリ「Trigger！」

ダブルドライバー「Cyclone・Trigger！」

Wの左半分の色が黒から青に変わった。そして胸元にトリガーマグナムが現れた。

W・CT「よっと」

ビードーパント「うわっ、そんなのありか!？」

W・CT「翔太郎、メモリブレイクだ、」「ああ！」

トリガーマグナム「Trigger! マキシマムドライブ！」

W・CT「トリガーエアロバスター！」

そう言ってトリガーマグナムから緑色の小型竜巻を連続発射され、ビードーパントを吹き飛ばした。そしてドーパントの変身が解け、メモリがこなごなに砕けた。

シューウウ Wの変身解除音

港文也「う、うう・・・」

翔平「ええ・・・と」

港文也「お前のせいで、俺は・・・」

翔平「・・・・・・・・・・」

港文也「俺は、お前よりもまじめに生きていたのに、どうして俺はあんな惨めな仕打ちにあったんだ・・・俺は！」

翔平「確かに、俺は罪を犯した。だが、あんたも罪を犯した、違うか？」

港文也「うう・・・」

翔平「俺の罪はハッキングをしてアンタの情報を外にもらしたことだ。俺は俺の罪を数えたぞ。今度はあんたの番だぜ。さあ、お前の罪を数えろ、」

港文也「な・・・に」

港文也は力尽きてその場に倒れた。

そして

事件は何とか丸く収まった。しかし、まさかあの都市伝説の仮面ライダーとうちの学校の噂が両方とも事実だったとはな・・・ハガキ・出すか

正夫「なあ、翔平今日こそカラオケ行こうぜ！」

翔平「ああ、Finger on the Trigger 歌おうぜ」

渡「ダメだよ正夫、家帰って宿題やらないと、」

俺と正夫がカラオケ行く話をしていると、正夫の兄さん、渡さんが止めた。

正夫「分かったよ、パパン・・・」

パパン？俺はいつも思っていた。兄弟なのになぜパパと呼ぶのか。

## 第02話・Fの戦士／お前の罪を数えろ（後書き）

今回の港文也とのやり取り、鳴海壮吉とマツのやり取りをまねしました。

### 第3楽章・NEWキバ・ウェイクアップ！（前書き）

今回、正夫のキバが出てきます

### 第3楽章・NEWキバ・ウェイクアップ！

前回のあらすじ：

翔太郎「まず、あの怪人のことだけどな、あれはドーパントだ。」

翔平「どーぱんと？」

翔太郎「こいつはガイアメモリつつてな。こいつは地球の記憶を内蔵していて、これを使って変身したのがドーパントだ。」

フィリップ「ちなみに、さっき検索した結果、さっきのドーパントのメモリの名前はビー、蜂の記憶を司っている。」

翔平「いやゝ実はさあ・・・中学のとき理科の先生が生徒にセクハラしてさあ、俺も好きな先生じゃなかったからさその先生のパソコンにハッキングしてあの人のばれるとやばいこと校長にメールしたんだよ。まあ、結局その先生の教育職員免許は処分されたりいけど、」

フィリップ「なるほど、君のせいで人生が終わった。君に復讐するためにメモリを使った、か・・・なるほど、条件は完璧だね。後は居場所を検索する必要がある。」

フィリップ「キーワードは蜂、セクハラ、中学理科教師、そして・・・松風翔平」



フィリップ「なるほど、犯人の名前は港文也<sup>みなとふみや</sup>。彼の住むマンションは・・・」

バリイイイン！！

外から針が飛んできた。外には、ビードーパントがいた。

フィリップ「せっかく検索したのに、無駄になったな・・・」

トリガーメモリ「Trigger！」

ダブルドライバー「Cyclone - Trigger！」

W - CT「翔太郎、メモリブレイクだ、」「ああ！」

トリガーマグナム「Trigger！マキシマムドライブ！」

W - CT「トリガーエアロバスター！」

港文也「俺は、お前よりもまじめに生きていたのに、どうして俺はあんな惨めな仕打ちにあつたんだ・・・俺は！」

翔平「確かに、俺は罪を犯した。だが、あんたも罪を犯した、違うか？」

港文也「うつ・・・」

翔平「俺の罪はハッキングをしてアンタの情報を外にもらしたことだ。俺は俺の罪を数えたぞ。今度はあんたの番だぜ。さあ、お前の罪を数えろ、」

港文也「な・・・に」

正夫「なあ、翔平今日こそカラオケ行こうぜ！」

翔平「ああ、Finger on the Trigger 歌おうぜ」

渡「ダメだよ正夫、家帰って宿題やらないと、」  
俺と正夫がカラオケ行く話をしていると、正夫の兄さん、渡さんが止めた。

正夫「分かったよーパパン・・・」  
パパン？俺はいつも思っていた。兄弟なのになぜパパと呼ぶのか。

そして現在、紅家

翔平「だからこれはこうだって！」

正夫「えー！さっぱりわからないよ！」

翔平「おい、早く宿題終わらせねーとカラオケいけねーぞ」

まっ、結局こいつ（正夫）の宿題終わらせるのに6時までかかってカラオケにいけなかった。どうして渡さんは勉強できるのに、こいつは全くなんだらう。

翔平「それじゃあ、明日な」

正夫「じゃね」

渡「またね」

そして次の日

翔平「よっ、フィリップ」

フィリップ「何だ君か。僕は本を読むのに集中したいんだ」

翔平「なあ、なんでお前いつも真っ白な本読んでるんだ？」

フィリップ「そうか・・・君にはこの本の文字が見えないのか・・・なあ松風翔平、君はなぜ君だか分かるかい？」

翔平「・・・哲学か？」

フィリップ「まあいいさ、君に聞いたのが間違いだっただかもね、」

翔平「おい、それってどういう

正夫「翔平！」

翔平「ん、どうした正夫？」

正夫「パパンが今日はカラオケ行ってい言って！」

翔平「そうか、じゃあクイーンとエリザベスでも呼ぶか？」

正夫「おっ、いいね！」

そして放課後

正夫「ああ、カラオケ久しぶりだな！」

翔平「ここらへん、テストばかりだったしな、ストレスたまっちゃうよ」

エリザベス「でもそのぶん今日はたまっているストレスをだしまし  
ようよ！」

翔平「そうだな、クイーンも楽しもーぜ！」

クイーン「はっ、はい！翔平センパイ！」

正夫「あれ？もしかして緊張している！？」

クイーン「そ、そんなことないですよ！何言っているんですか正夫  
さん！」

正夫「ふーん」

翔平「おい、それよりカラオケ行くぞ。この時間帯は込んでるから

急がないと」

そう言って俺たちはカラオケに行き始めた。

でも次の瞬間・・・

ドカアアアアン！！

エリザベス「きゃ！な、何！？」

俺たちの前でいきなり爆発が起きた。

俺たちの前にステンドガラスのような体をしたウサギを思わせる怪人がいた。

翔平「みんな、どうやらカラオケは中止のようだ、」

あれはいったい何なんだ！？ドーパント・・・とは違うみたいだし。

ウサギの怪人「ライフエナジー、いったきまゝす！」

そういうと、怪人は爆発を見てよってきた野次馬の後ろの空中に2本の巨大な牙のような物体が現れて、野次馬の肩の近くにささった。

野次馬「うわっ、なにをするんだやめr・・・」

野次馬が断末魔を残し、体が透明になり、

・・・消えた。

そして怪人はゆっくりとクイーンに近づいた。

クイーン「い、いや!」

クイーンはさっきの爆発のせいで足をくじいていた。

翔平「間に合え!」

俺はクイーンのところに行って、クイーンをかばった。  
しかし、次の瞬間。

ウサギの怪人「ぐああ!」

?なんだ、いったい何が?そこには仮面ライダーイクサこと名護啓介がいた。

名護「ファンガイア・・・その命、神に返しなさい!」

イクサナツクル「レ・デ・イ」

ファーン…ファーン… イクサナツクルの待機音

名護「変身!」

イクサベルト(イクサナツクル)「フィ・ス・ト・オ・ン」

キーン!ヒューン…ピロロ…キュイッピルッジャキーン!!

イクサ変身音

イクサはセーブモードからバーストモードになった。

イクサB・M「ファンガイア、その命、神に返しなさい!」

イクサはイクサカリバー・カリバーモードをとりだし、ウサギのファンガイアに攻撃を仕掛けた。しかし、

ウサギファンガイア「うわあああ！なんてな！！」

イクサB・M「何！？」

背後から複数のウサギファンガイアと親玉らしき馬のファンガイアがイクサを攻撃した。そのせいで、イクサの変身が解け、ベルトも取れた。

名護「くっ、う・・・」

ウサギファンガイア「アンタ確か、裏切り者のキングの仲間だったよなあ。そいつを殺せるとは、うれしい誤算だぜ！」

翔平「絶体絶命・・・ね」

そのとき、目の中に1mほど近くに落ちているイクサナックルとベルトを見た。いまはそうするしか・・・ないか！

翔平「ちよつとここで待ってな」

クイーン「えっ、」

翔平「よつと」

名護「君！」

翔平「やり方はさっき見ていた、こうすりゃいいんだな、」  
俺はイクサナックルを手のひらに近づけた。

イクサナツクル「レ・デ・イ」

ファーン…ファーン… イクサナツクルの待機音

翔平「変・・・身！」

イクサナツクル（イクサベルト）「フィ・ス・ト・オ・ン」

キーン！ヒューン…ピロロ…キュイッピルツジャキーン！！

イクサ変身音

イクサS・M「なるほど・・・意外と着心地はいいな。」

ウサギファンガイア「お前に俺たちをたおせるか？」

イクサS・M「やるっきゃないっしょ」

正夫「翔平！」

イクサS・M「正夫！？」

正夫「俺もいつしよに戦うぜ！こい、キバちゃん！」

キバットバットEV世「わーい、祭りだ、祭りだ！」

ガブツ！ キバットEV世が正夫の手をかねで魔王力を注入した音

正夫「変身！」

そしてそして正夫の姿はみるみるNEWキバ・キバフォームの姿に



なつた。

イクサS・M「正夫も・・・仮面ライダー!？」

NEWキバ「いこう、翔平！」

イクサS・M「あ、ああ！」

### 第3楽章・NEWキバ・ウェイクアップ！（後書き）

名護さん、全く活躍ねえ……

正夫は設定が全く存在しないので、自分で色々設定しました。

## 第4楽章・Withフレンズ・2人のライダー（前書き）

キバ編の後編です

## 第4楽章・Withフレンズ・2人のライダー

前回のあらすじ：

フィリップ「なあ松風翔平、君はなぜ君だか分かるかい？」

翔平「・・・哲学か？」

フィリップ「まあいいさ、君に聞いたのが間違いだったかもね、」

翔平「おい、それってどういう

正夫「翔平！」

翔平「ん、どうした正夫？」

正夫「パパンが今日はカラオケ行ってい言って！」

イクサB・M「ファンガイア、その命、神に返しなさい！」

翔平「絶体絶命・・・ね」

翔平「やり方はさっき見ていた、こつすりゃいいんだな、」

イクサナツクル「レ・デ・イ」

翔平「変・・・身！」

イクサナツクル（イクサベルト）「フィ・ス・ト・オ・ン」

イクサS・M「なるほど・・・意外と着心地はいいな。」

正夫「俺もいっしょに戦うぜ！こい、キバちゃん！」

キバットバットIV世「わーい、祭りだ、祭りだ！」

ガブツ！ キバットIV世が正夫の手をかねで魔王力を注入した音

正夫「変身！」

そしてそして正夫の姿はみるみるNEWキバ・キバフォームの姿になった。

イクサS・M「正夫も・・・仮面ライダー！？」

NEWキバ「いこう、翔平！」

イクサS・M「あ、ああ！」

そして

ウサギファンガイア「よつと」

イクサS・M「すばしっこいやローだなー！お前にはコイツだ！」

俺はイクサカリバーをガンモードに変形し、ウサギファンガイアたちの方向に乱れうちをした。

ウサギファンガイア「うわああああ！」

イクサS・M「効果覷面ってか、お前達みたいなうざいハエにはいい殺虫剤だな」

一方正夫の変身したNEWキバ・キバフォームはホースファンガイアと戦っていた。

ホースファンガイア「貴様、もしかして裏切り者のキングの弟か？」

NEWキバ「いやっ、あいにく俺はその裏切り者のキングの弟の・・・息子だ！」

そういつてNEWキバはガルルフエッスルを出した。

キバットEV世「ガルルセイバー！ピリリ・・・ピューー！ピューイーピイッ！」

そしてキャッスルドランの中では・・・

ドッグ「・・・誰だ？」

バツシャー「僕じゃない」

ガルル「・・・俺だ」

そういうとガルルの姿はみるみる「腕組みをした狼男」の形をした彫像になった。

そしてガルルはキャッスルドラン射出され、それをNEWキバは見

事に左手でキャッチし、  
彫像は剣に変形した。

イクサS・M「なんだありや！？もしかしてこれにも・・・あった！」

俺はとつさにイクサベルトを見た。腰にはガルルフエッスルと同型のフェイクフエッスルをとってイクサベルトに入れた。

イクサベルト「ガ・ル・ル・フ・エ・イ・ク」

「ピリリ・・・ピーー！ピイイーピッツ！」

イクサベルトからガルルを呼ぶときと同じ音が鳴ると、NEWキバの手にあつたガルルセイバーがイクサS・Mの手元に来た。

NEWキバ「ちよつ、ちよつと翔平！なにするんだよ！」

イクサS・M「悪い、悪い・・・それよりこれ、スゲー切れ味いいな」

そっついながら近くにいたウサギファンガイアをガルルセイバーで切ってみた。

NEWキバ「あーもーいいよ、さてキバちゃん、そろそろ決めるよ！」

キバットEV世「オーケー正夫、そろそろ祭りの終わりだ！」

NEWキバはウェイクアップフエッスルを取り出し、キバットEV世に吹かせた。

キバットEV世「ウェイクアップ！」

そういうとキバットE.V世がベルトから外れて、NEWキバの右足の拘束具を外した。

NEWキバ「いくぜ！」

そういうとNEWキバは空高く飛び、新・ダークネスムーンブレイクをホースファンガイアに放った。

ホースファンガイア「うあああああ！！！」

ホースファンガイアはさらに全身がステンドグラス状になり、粉々になった。そこから光の球のようなものが出てきた。

イクサS・M「へえ、すげえな・・・俺もやってみるか」

俺はナツクルフェッスルを取り出し、イクサベルトに入れた。

イクサベルト「イ・ク・サ・ナ・ツ・クル・ラ・イ・ズ・ア・ツ・プ」

イクサS・M「ナツクル？ナツクルってことは変身に使ったこれだな」

俺はイクサナツクルを取って複数のウサギファンガイアに向けた。

イクサナツクルから電圧が出てきて、ファンガイア全員に直撃した。

そしてウサギファンガイアたちもホースファンガイアのように全身がステンドグラス状になり、粉々になった。そして、光の球のようなものが出てきた。

イクサS・M「一件落着だな、」

そう言っただけでベルトを外し、クイーンたちの近くに行った。

翔平「大丈夫か、」



クイーン「は、はいなんとか、」

エリザベス「先輩達やあの人は？」

エリザベスのいつてるあの人とは名護さんの事である

正夫「名護さん、大丈夫ですか？」

翔平「えっ、知り合いなの！？」

正夫「ま、まあね」

翔平「そうなの。あつ、それとこれお借りしました。」

俺は名護さんにイクサベルトとイクサナックルを返した。

名護「き、み・・・う」

そう言つて名護さんはさっきの不意打ちがきいたのか、気絶してしまつた。

エリザベス「だ、大丈夫ですか！？」

正夫「大丈夫、気絶しているだけみたい」

翔平「まずどこかで休ませないとな・・・一番近いのは・・・」

で鳴海探偵事務所に来た。

翔太郎「どうして内に来るかな？」

翔平「いいじゃないですか、人が困ってるときはお互い様じゃないですか？あつ、そういえば今何時ですか？」

亜樹子「5時ちよつと前よ」

それをきいて俺とフィリップが反応した。

翔平「ちよつとラジオ借りますね、」

フィリップ「いいやダメだ」

翔平「いいじゃん、ラジオ聞いたって」

フィリップ「ダメだ僕も聞きたいものがある」

翔平「お願い」

フィリップ「ダメだ」

翔平「お願い」

フィリップ「ダメだ」

翔平「お願い」

フィリップ「ダメだ」

これって無限ループする？こころ辺で断ち切らないと！

翔平「俺は

フィリップ「僕は

翔平・フィリップ「園咲若菜のヒーリングプリンセスが聞きたいんだ！

・・・えっ」

#### 第4楽章・withフレンズ・2人のライダー（後書き）

園咲若菜のヒーリングプリンセスでまさかのかぶり。いったいどうなる！？そして名護さんの行方は！？

## 第5話・Aとの接触/イクサV2爆現（前書き）

オリジナルライダー、始めました（冷やし中華、始めました風に）

## 第5話・Aとの接触/イクサV2爆現

前回のあらすじ：

NEWキバ「さてキバちゃん、そろそろ決めるよ！」

キバットEV世「オーケー正夫、そろそろ祭りの終わりだ！」

キバットEV世「ウェイクアップ！」

イクサS・M「へえ、すげえな・・・俺もやってみるか」

イクサベルト「イ・ク・サ・ナ・ツ・クル・ライ・ズ・ア・ツ・  
プ」

翔平「ちょっとラジオ借りますね、」

フィリップ「いいやダメだ」

翔平「いいじゃん、ラジオ聞いたって」

フィリップ「ダメだ僕も聞きたいものがある」

翔平「お願い」

フィリップ「ダメだ」

翔平「お願い」

フィリップ「ダメだ」

翔平「お願い」

フィリップ「ダメだ」

翔平「俺は

フィリップ「僕は

翔平・フィリップ「園崎のヒーリングプリンセスが聞きたいんだ！

・・・えっ」

そして

ラジオ「さあ、始めりました、園咲若菜の・・・ヒーリングプリンセス！今日も元気120%でお送りします！」

翔平「待ってました！」

ラジオ「ではまずは、風都ミステリーツアー！今日もたくさんの方々が届いてます！」

フィリップ「今日はいったいどんな謎が！？」

ラジオ「まず1つ目は、・・・なんと、風都を救う謎のヒーロー、仮面ライダーです！」

フィリップ「仮面ライダー？」

翔平「やったー！読まれたー！ー！ー！！」

フィリップ「君がだしたのかい？」

翔平「まあ、聞いてなって！」

ラジオ「なんでも都市伝説の仮面ライダーが存在していたらしいです！町の危機をさっそうと現れて悪をたおすヒーローですか・・・若菜も会ってみたいな」

フィリップ「仮面ライダー・・・」

翔太郎「仮面ライダー・・・」

正夫「仮面・・・ライダー・・・」

名護「うつ・・・うつ」

翔太郎「2人で1人の・・・」

フィリップ「仮面ライダー・・・」

翔太郎・フィリップ「W！！！」

正夫「町を救う仮面ライダーNEWキバ・・・か」

名護「くっ、う・・・ここは」



正夫「あつ、名護さん大丈夫ですか!？」

名護「ま、正夫くん」

翔平「あのー大丈夫ですか？」

名護「き、きみは!」

翔平「あつ、すみません、勝手にあのベルト借りて、何かまずかったですか？」

名護「いつ、いやそのことはいいんだ。ただ、」

翔平「ただ？」

名護「君に素晴らしき青空の会に入って欲しいんだ!」

翔平「はっ、はい!？」

名護「君はイクサに変身し、性能を十分に使いこなした!君ならこの、イクサV2を使いこなせるはずだ!」

名護はそういうとイクサベルトとイクサナックルにそっくりなイクサベルトV2とイクサナックルV2を取り出した。

正夫「名護さん!イクサV2は完成していたんですか!」

名護「あつああ、というわけでこれを君に託す!答えは明日カフェ・マル・ダムールでなく!」

そう言つて名護は去つていった。

翌日、カフェ・マル・ダムール

翔平「へえ・・・ここがカフェ・マル・ダムールか」

名護「きみ、ここだ。」

翔平「あつ、どうも」

名護「まずは自己紹介をしよう、俺は名護啓介だ。そしてこちらが」

嶋「嶋護だ。しまもる」

翔平「あつ、松風翔平です。」

嶋「名護くんから君の事は聞いている。どたんばでの変身でありながら複数のファンガイアをたおしたと。」

翔平「はあ・・・」

嶋「君に素晴らしき青空の会に入会してもらいたいんだ。」

翔平「あの、素晴らしき青空の会ってなんですか？」

嶋「素晴らしき青空の会というのは私が会長を務めるファンガイアを殲滅するために結成された組織だ。警察や各企業に太いパイプラインを持ち、会員が犯罪を犯した際でも揉み消し得る権力を有している。」

翔平「マジすか!？」

嶋「名護くんのようなファンガイアとの直接的な戦闘を行なう「戦士」の他、戦士の武器や兵器の開発、諜報やファンガイアの研究なども行なっている。そして我々は君に青空のかいの戦士になってほしいんだ」

翔平「そういわれても・・・」

渡「僕達からもお願いするよ」

翔平「渡さんに正夫！」

渡さんと正夫が店内に入ってきた。

正夫「お願いだよ翔平、翔平の力が必要なんだ。」

名護「お願いだ」

翔平「・・・分かりました。青空の会に入ります。」

嶋「本当かい！？助かるよ、君のような人材とはなかなか出会えないからね。」

名護「ではよろしく」

翔平「よろしくお願いしm

ドカアアアン！！！！

外で爆発が起こった。

翔平「なんだ！」

嶋「早速お仕事のようだな」

名護「行くぞ渡くん、正夫くん、翔平くん！」

渡・正夫・翔平「……はい！」

外には昨日戦ったファンガイアたちよりもさらにステンドガラス状のキツツキ風のファンガイアがいた。

名護「翔平くん、油断するな。ヤツは普通のファンガイアではない。従来のファンガイアを大きく上回る力を持ったネオファンガイアだ！」

翔平「なるほど、まあ戦うことには変わりはないか！」  
俺はV2イクサベルとV2イクサナツクルをだした。

渡「いくよ、キバット！タツロット！」

正夫「こい、キバちゃん！」

キバットバットEEEE世「キバって、行くぜ！」

タツロット「ドラマチックにいきますよ！」

キバットバットEV世「わーい、祭りだ、祭りだ！」

V2イクサナツクル・イクサナツクル「レ・デ・イ」

キバットEEEE世・キバットEV世「ガブッ！」

翔平・正夫・名護・渡「「「「変身!」」」」

V2イクサベルト(V2イクサナツクル)・イクサベルト(イクサナツクル)「「ファイ・ス・ト・オ・ン」」

キーン!ヒューン・・・ピロロ・・・キュイッピルツジャキーン!!

俺はイクサV2・バーストモードに、正夫はNEWキバ・キバフォームに、名護さんはイクサ・ライジングフォームに、そして渡さんはキバ・エンペラーフォームになった。

キツツキネオファンガイア「貴様たちにこの俺がたおせるとでも?」

NEWキバ「たおせるね」

キバ・エンペラーフォーム「もうあやまちを犯さないために!」

ライジングイクサ「ネオファンガイア、その命、神に返しなさい!」

イクサV2B・M「たおすさ、それが俺の運命なら!」

## 第6話・Aとの接触/ライダーの名乗り

前回のあらすじ：

ラジオ「さあ、始まりました、園咲若菜の・・・ヒーリングプリンセス！今日も元気120%でお送りします！ではまずは、風都ミステリーツアー！今日もたくさんのハガキが届いてます！まず1つ目は、・・・なんと、風都を救う謎のヒーロー、仮面ライダーです！なんでも都市伝説の仮面ライダーが存在していたらしいです！町の危機をさっそうと現れて悪をたおすヒーローですか・・・若菜も会ってみたいな」

翔太郎「2人で1人の・・・」

フィリップ「仮面ライダー・・・」

翔太郎・フィリップ「W!!」

名護「君に素晴らしき青空の会に入って欲しいんだ！」

翔平「はっ、はい!？」

名護「君はイクサに変身し、性能を十分に使いこなした！君ならこの、イクサV2を使いこなせるはずだ！」

嶋「素晴らしき青空の会というのは私が会長を務めるファンガイアを殲滅するために結成された組織だ。警察や各企業に太いパイプラインを持ち、会員が犯罪を犯した際でも揉み消し得る権力を有している。名護くんのようなファンガイアとの直接的な戦闘を行なう「戦士」の他、戦士の武器や兵器の開発、諜報やファンガイアの研究なども行なっている。そして我々は君に青空のかいの戦士になってほしいんだ」

渡「いくよ、キバット！タツロット！」

正夫「こい、キバちゃん！」

キバットバットエエエ世「キバって、行くぜ！」

タツロット「ドラマチックにいきますよ！」

キバットバットエエ世「わーい、祭りだ、祭りだ！」

V2イクサナツクル・イクサナツクル「レ・デ・イ」

キバットエエエ世・キバットエエ世「ガブッ！」

翔平・正夫・名護・渡「「「変身！」」」

V2イクサベルト（V2イクサナツクル）・イクサベルト（イクサナツクル）「「フィ・ス・ト・オ・ン」」

キッツキネオファンガイア「貴様たちにこの俺がたおせるとでも？」

NEWキバ「たおせるね」

キバ・エンペラーフォーム「もうあやまちを犯さないためにも！」

ライジングイクサ「ネオファンガイア、その命、神に返しなさい！」

イクサV2B・M「たおすさ、それが俺の運命ならば！」

\*\*\*\*\*

キバ・エンペラー「はっ！」

NEWキバ「やっ！」

キッツキネオファンガイア「きかない！」

NEWキバ「くっ、きかない、やっぱり3人呼んでドガバキに・・・

」

キバットIV世「ダメだ正夫！そいつは危険すぎる！下手したら・・・

」

イクサV2B・M「よつと」

俺はイクサカリバー・ガンモード乱射した。しかし効くはずもなく、キッツキネオファンガイアが突進してきた。

イクサV2B・M「そういう時はこいつだな！」



俺はすばやくイクサカリバー・ガンモードをカリバーモードに変形させて、キッツキネオファンガイアをついた。

キッツキネオファンガイア「くっ、人間ごときがー！ー！」

キッツキネオファンガイアの体からステンドグラス状の針がでてき、俺、ライジングイクサ、NEWキバ、キバ・エンペラーフォームに命中した。

イクサV2「痛、やってくれるな」

ライジングイクサ「だがこの状況では我々の勝ちも同然だ」

キッツキネオファンガイア「おっと、これを見てもそういえるかな？」

キッツキネオファンガイアの背後に無数のサバトが現れ、それがひとつに合わさり、無数のサバトがライオンファンガイア（ルーク）になった。

キバ・エンペラー「アイツは、ルーク！」

NEWキバ「けどこっちは4人、大丈夫だ！」

キッツキネオファンガイア「そういうと思っただぜ。お前達、出てきな」

キッツキネオファンガイアの言葉で3体のハゲタカを思わせるファンガイアが現れた。

名護「ネオファンガイアに元・チェックメイトフォーのルーク、そして普通のファンガイアが三体か。」

この状況、一体でも強いネオファンガイアと、みんながおびえるライオンのファンガイア、そしてザコ3体か。ざこはどうにかなくても、後の二体がダメかもな。

そんな絶体絶命な状況の中、俺が最初に見た仮面ライダーが現れた。

フィリップ「翔太郎、ヤツはドーパントとは違うみたいだ、」

翔太郎「だが敵であるこには変わりはないだろ。」

サイクロンメモリ（緑）「Cyclone!」

ジョーカーメモリ（黒）「Joker!」

翔太郎・フィリップ「変身!」

ダブルドライバー「Cyclone-Joker!」

「ジャジャーンジャジャーンチャララン!（ピロピロピロ…）」

「（サイクロン変身音&発光）」

「（ジャギーン）バンバンバン!」（ジョーカー変身音&発光）」

キッツキネオファンガイア「なんだお前は?」

W・C「仮面ライダー・・・仮面ライダーW!」

キッツキネオファンガイア「ほう・・・」

ライオンファンガイア「ゲームの始まりだ・・・」

ハゲタカファンガイア×３「ひゃーはっ はっ はっ はっ はっ !!」

## 第7楽章・序章・仮面ライダー

前回のあらすじ：

NEWキバ「くっ、きかない、やっぱり3人呼んでドガバキに・・・」

「

キバットEV世「ダメだ正夫！そいつは危険すぎる！下手したら・・・」

「・」

イクサV2「痛、やってくれるな」

ライジングイクサ「だがこの状況では我々の勝ちも同然だ」

キッツキネオファンガイア「おっと、これを見てもそういえるかな？」

「」

キッツキネオファンガイアの背後に無数のサバトが現れ、それがひとつに合わさり、無数のサバトがライオンファンガイア（ルーク）になった。

キバ・エンペラー「アイツは、ルーク！」

名護「ネオファンガイアに元・チェックメイトフォーのルーク、そして普通のファンガイアが三体か。」

W・CJ「翔太郎、ヤツはドーパントとは違うみたいだ、」「だが敵であるこには変わりはないだろ。」

キツツキネオファンガイア「なんだお前は？」

W・CJ「仮面ライダー・・・仮面ライダーW!!」「」

キツツキネオファンガイア「ほう・・・」

ライオンファンガイア「ゲームの始まりだ・・・」

ハゲタカファンガイア×3「「「ひゃーはっはっはっはっはっ!!!!」  
「「「」

\*\*\*\*\*

ハゲタカファンガイア1「おらよ!!」

W・CJ「接近戦か、それならこれだね」

メタルメモリ「Metal!!」

ダブルドライバー「Cyclone・Metal!!」

「ジャジャーンジャジャーンチャララン!!（ピロリロピロリロ...）」  
「（サイクロン変身音&発光）」

「ジャジャジャン!!（カーン!!）ジャジャジャジャン!!」（メタル変身音&発光）」

ハゲタカファンガイア「なんだこいつ！色が変わった！」

W・CM「こいつで決めるぜ」

メタルシャフト「Metal！マキシマムドライブ！」

W・CM「メタルツイスター！」

ハゲタカファンガイアはドーパントではないため、粉々に砕けた。

イクサV2「やってるね」

W・CMがハゲタカファンガイアを倒しているのを見届けていた中、俺はなぜかルークことライオンファンガイアと戦っていた。名護さんは俺に、「君がチェックメイトフォーのルーク相手にどこまでできるか見たい」って言って俺を戦わせている。

ライオンファンガイア「おらあ！」

ヤツの攻撃力は他のファンガイアとは次元が違う。まともに受けていたら間違いなくやられる。弱点はないのか！？

イクサV2「くそ！」

ライオンファンガイア「ぐわあああ！」

俺はイクサカリバー・カリバーモードでルークの右肩を攻撃した。思いのほか効いたらしく、地面に倒れてはいつくばっている。

イクサV2「弱点はそこか！」

一方、NEWキバは

キバットⅤ世「ドッガハンマー！」

キバットⅤ世はドッガハンマーを呼び寄せ、NEWキバはそれを両手で見事にキャッチ、NEWキバ・ドッガフォームになった。

NEWキバ「そりゃ！」

ハゲタカファンガイア「うわっ！」

ドッガハンマーの攻撃力が高いのかハゲタカファンガイアは吹き飛ばされた。

イクサⅤ2「アア、あれ使えそうだな」

ルークの弱点の右肩を攻撃するのにあのハンマーは最適だ。そうだが、昨日の剣みたいに雅の持っていたのと形の似たやつがあるはずだ・・・あつた！！

イクサⅤ2「正夫、それ借りるぞ！」

NEWキバ「えっ？」

イクサベルトⅤ2「ド・ツ・ガ・フ・エ・イ・ク」

グオオン・・・グオオン・・・グオン！

イクサⅤ2「よしっ！そりゃ！」

ライオンファンガイア「ぐああ！」

イクサV2「痛恨の一撃だな、もういっちょ！」

ライオンファンガイア「ぐわっ！」

イクサV2「とどめはこいつだ！」

イクサベルトV2「イ・ク・サ・カ・リ・バ・ー・ラ・イ・ズ・ア・ツ・プ」

ピロロピロリッピロロピロリッ

イクサV2「そりゃ！」

ライオンファンガイア「うわああああ！！！」

ライオンファンガイア（ルーク）は全身がステンドグラス状になり、粉々になった。

ライジングイクサ「上出来だ、正夫君、こっちも決めるぞ！」

NEWキバ「はい！」

ライジングイクサはライザーフェッスルを、NEWキバはウェイクアップフェッスルを取り出した。

イクサベルト「ピロロピロリッ」

キバットEV世「ウェイクアップ！」

ライジングイクサはハゲタカファンガイアは銃弾を打ち込んだ。しかし力が強かったのか反動で吹き飛ばされた。そしてそのままその



反動をいかしてとび蹴りを、NEWキバは新・ダークネスムーンプ  
レイクを放った。

ハゲタカファンガイア×2「くわああ!」

ハゲタカファンガイア2体もまた全身がステンドグラス状になり、  
粉々になった。

イクサV2「残るはあの鳥ヤローか、」

一方キバエンペラーフォームとキツツキネオファンガイアは・・・

タツロット「ウェイクアップ・フィーバー!」

キバ・エンペラーフォームはエンペラームーンブレイクを放った。  
キツツキネオファンガイアは普通のファンガイア以上に粉々になっ  
た。

ライジングイクサ「やったな、渡くん!」

そしてみんな変身を解除した。

名護「君達はいったい何者だ?」

翔太郎「あ、俺たちはただの私立探偵だ」

フィリップ「・・・仮面ライダーだけどね」

名護「まあそれより翔平くん。君はすでに立派な戦士だ。これから  
分からないことならなんでも教える。」

渡「改めてよろしくね、翔平くん。」

正夫「よろしく、翔平！」

翔平「こちらこそよろしく！」

## 第8話・目覚めし魂（前書き）

アギト編です

## 第8話・目覚めし魂

前回のあらすじ：

W・C「接近戦か、それならこれだね」

メタルメモリ「Metal!」

ダブルドライバー「Cyclone-Metal!」

メタルシャフト「Metal!マキシマムドライブ!」

W・CM「メタルツイスター!」

キバットIV世「ドツガハンマー!」

イクサV2「アア、あれ使えそうだな、正夫、それ借りるぞ!」

NEWキバ「えっ?」

イクサベルトV2「ド・ツ・ガ・フ・エ・イ・ク」

グオオン・・・グオオン・・・グオオン!

イクサV2「よしっ！そりゃ！」

ライオンファンガイア「ぐああ！」

イクサV2「痛恨の一撃だな、もういっちょ！」

ライオンファンガイア「ぐわっ！」

イクサV2「とどめはこいつだ！」

イクサベルトV2「イ・ク・サ・カ・リ・バ・ー・ラ・イ・ズ・ア・  
ツ・プ」

ライジングイクサ「上出来だ、正夫君、こっちも決めるぞ！」

NEWキバ「はい！」

イクサベルト「ピロロピロリッ」

キバットEV世「ウェイクアップ！」

タツロット「ウェイクアップ・フィーバー！」

名護「君達はいったい何者だ？」

翔太郎「あ、俺たちはただの私立探偵だ」

フィリップ「・・・仮面ライダーだけだね」

名護「まあそれより翔平くん。君はすでに立派な戦士だ。これから分らないことならなんでも教える。」

渡「改めてよろしくね、翔平くん。」

正夫「よろしく、翔平！」

翔平「こちらこそよろしく！」

\*\*\*\*\*

翔平「ああ、腹減った、なんかうまいもの食いたいな、」

時刻 8 時

腹の減った俺は自分の鼻を頼りにおいしそうな食べ物売っている店を探した。

翔平「！！この匂い！」

俺は足を止めた。店の名前は『Restaurant AGITO』。

カランカラン

翔一「いらつしゃいませ！こちらの席をどうぞ！」

翔平「どうも」

俺はメニューを見た。・・・翔一スペシャル？なんだそりゃ、たの  
んでみるか。

翔平「すいません。この翔一スペシャルをひとつ、」

翔一「はい、かしこまりました。」

そして、料理がキタ。今までに見たことのない料理。よく言えば創作料理、悪く言えば軽いゲテモノ料理だ。

翔平「い、いただきます」

俺は一口その食べ物を口の中に運んだ。

翔平「・・・！うめえ〜！」

俺はもう一口、もう一口とその食べ物を口の中に運んだ。そしてき  
ずいた時には皿から食べ物がなくなっていた。

翔平「ごちそさまでした、」

時刻 9 時

目の前にナメクジのような怪人が現れた。

翔平「お仕事の時間か、行くぜ」

イクサナツクルV2「レ・デ・イ」

翔平「変、身！」

イクサナツクルV2（イクサベルトV2）「フィ・ス・ト・オ・ン」  
キーン！ヒューン・・・ピロロ・・・キュイッピルッジャキ  
ーン！！

イクサV2 S・M「さーて行きますか！」  
俺はセーブモードからバーストモードに変わった。

イクサV2 B・M「そりゃ！」  
俺はイクサカリバー・カリバーモードで怪人を切った。

怪人「ぐわあ！お前、アギトじゃない。でもお前アギトの力を！」

イクサV2「あん、アギト？」

そして『Restaurant  
ant AGITO』では

翔一「来た！」

翔一は何かを感じ取ったのか、店を飛び出し、愛車のホンダVTR  
1000F・FIRESTORMに乗って店を後にした。

そしてイクサV2と怪人  
は



イクサV2「何だこいつ？ドーパントでもファンガイアでもネオファンガイアでもないっばい！？」

謎の怪人「アギト・・・抹殺・・・」

謎の怪人は左手で右手の甲を“闇の力”の文字の形に辿るという、殺しのサインを切った。そして怪人の天使の輪のような円盤状の発光体が頭上に出現して、そこから槍のようなものが出てきた。

謎の怪人「フン！」

怪人は槍をベルトになげてきた。その生でベルトは壊れ、変身が解除された。

翔平「ぐわっ！やべえ、嶋さんや名護さんになんて言おう、」

怪人は俺に槍を投げてきた。しかしそのとき俺の前『AGIT』の店員さんが乗ったホンダVTR1000F・FIRESTORMが槍をはじいた。

翔一「大丈夫ですか！」

翔平「あなたは！」

翔一「あいつらは！俺と湯川さんと葦原さんで全員倒したはずなのに！」

怪人「アギト・・・抹殺！」

そついうと怪人は翔一さんにも槍を投げた。

翔平「危ない！」

今度は俺が翔一さんを助けた。

翔一「ありがとう、それより・・・」

翔一は何かのポーズをとり、「キイイイイイイ……ン！」  
という音と共にベルト・オルタリングが現れた。

ヴオオオオン……………ヴオオオオン……………力を  
溜めていそうな音

翔一「変身！」

ビューーン！フオーン！ 変身音

翔一さんの姿はたちまち仮面ライダーアギト・グランドフォームに  
変わった。

アギト・G・F「フン！」

謎の怪人「ア・・・ギ・・・ト・・・滅殺！」

謎の怪人は左手で右手の甲を“闇の力”の文字の形に辿るといって、  
殺しのサインを切った。そして怪人の天使の輪のような円盤状の発  
光体が頭上に出現して、そこから槍が出てきた。

アギト・G・F「！」

アギトはベルトの左についてるスイッチのようなものを押してベル  
トから長槍・ストームハルバードが出てきた。それと反応したのか、  
胸の部分と左腕が青色に変わり、アギトはグランドフォームから  
ストームフォームに変わった。

アギト・S・F「ハッ！」

怪人「うつ！」

アギト・S・F「そろそろいくぞ、」

アギト・ストームフォームはハルバードスピンを発動し、怪人にぶつけた。

怪人「ぐわああ！」

怪人はアギト・ストームフォームの技を受けて爆死した。爆死する直前に武器を出すとき同様天使の輪のような円盤状の発光体が頭上に出現した。

翔一「ふう・・・」

翔一さんはアギトへの変身を解除した。

翔平「ほえー・・・（新たな仮面ライダー・・・、ね）」

あつ、そういえばイクサV2どうしよっかな、壊しちゃったよ。

あれメンテするのにどれだけ時間かかるんだろっな、

第9話・シユラウドの森・ペガサスの記憶（前書き）

新オリジナルライダー登場

## 第9話・シユラウドの森・ペガサスの記憶

前回のあらすじ：

翔平「ああ、腹減った、なんかうまいもの食いたいな、！！この匂い！」

店名『Restaurant AGITO』。

カランカラン

翔一「いらっしやいませ！こちらの席をどうぞ！」

翔平「どうも」

翔平「すいません。この翔一スペシャルをひとつ、」

翔一「はい、かしこまりました。」

翔平「お仕事の時間か、行くぜ」

イクサナツクルV2「レ・デ・イ」

翔平「変、身！」

イクサナツクルV2（イクサベルトV2）「フィ・スト・オ・ン」

キーン！ヒューン・・・ピロロ・・・キュ IPPルルツジャキイ

ーン!!

イクサV2 S-M「さーて行きますか!」

俺はセーブモードからバーストモードに変わった。

イクサV2 B-M「そりゃ!」

俺はイクサカリバー・カリバーモードで怪人を切った。

怪人「ぐわあ!お前、アギトじゃない。でもお前アギトの力を!」

イクサV2「あん、アギト?」

謎の怪人「アギト・・・抹殺・・・」

謎の怪人は左手で右手の甲を“闇の力”の文字の形に辿るという、殺しのサインを切った。そして怪人の天使の輪のような円盤状の発光体が頭上に出現して、そこから槍のようなものが出てきた。

謎の怪人「フン!」

怪人は槍をベルトになげてきた。その生でベルトは壊れ、変身が解除された。

翔平「ぐわっ!やべえ、嶋さんや名護さんになんて言おう、」

キイイイイイイイーン!

ヴオオオオン……………ヴオオオオン……………ヴオオオオン……………力を

溜めていそうな音

翔一「变身！」

ビューーン！フオーン！ 変身音

謎の怪人「ア・・・ギ・・・ト・・・滅殺！」

アギト・S・F「そろそろいくぞ、」

怪人「ぐわああ！」

翔一「ふう・・・」

翔平「ほえ・・・（新たなる仮面ライダー・・・、ね）」

\*\*\*\*\*

あつ、そういえばイクサV2どうしよっかな、壊しちゃったよ。  
あれメンテするのにどれだけ時間かかるんだろうな、

次の日、カフェ・マル・ダムール

翔平「すみません！」

俺は嶋さんにめいいっぱい謝っていた。

翔平「せっかくいただいたイクサV2を壊してしまってますいません！」

嶋「いいよ、それより敵はファンガイアでもネオファンガイアでも、そしてガイアメモリで変身したドーパントでもなかったそうだね。」

翔平「はい、敵はステンドグラス状ではありませんでしたし、爆発してガイアメモリが排出されたわけでもありません。」

嶋「それはアンノウンだ。」

翔平「アンノウン！？」

嶋「ああ、1ヶ月前に全て消滅したと思われていた怪人のことだ。君は超能力の存在を信じているかね？」

翔平「超能力・・・」

嶋「アンノウンたちはその超能力を持つ人間ばかりを襲っていたんだ。最近の調べでは超能力を持つ人間を襲っていた理由は、超能力者達ばかりを襲っていた理由はどうかやら超能力者には人間の進化形態、アギトになる可能性があるかららしい。アンノウンが超能力者ばかり襲っていた理由は、アギトに滅ぼされるのを恐怖していたという学説がある。」

翔平「アギト・・・そういえば俺を助けたやつをアギトって言うっていましたし、俺の中にアギトの力があるって・・・でも俺は超能力持っていませんし・・・」



嶋「そうか、まあそのことはおいといて君にこれを預けよう。」  
俺はファンガイアハンターを手に入れた      R P G 風に

嶋「イクサV2が直るまでこれを使って戦っていてくれ、」

そして俺はカフェ・マル・ダムールを後にした。

しかし、その直後・・・

モールファンガイア「グオオオオ!!」  
野生のモールファンガイアが現れた

翔平「くっ、ならこいつで!」

俺はファンガイアハンターを使って攻撃した。しかし、モールファンガイアは地中にもぐり、隠れてしまった。

翔平「あれっ? あいつどこ行って・・・

フィリップ「松風翔平」

翔平「フィリップに翔太郎さん?」

翔太郎「さっきの怪物どこ行った? まあそれより行くぜフィリップ」

フィリップ「ああ翔太郎、」

サイクロンメモリ「Cyclone!」

ジョーカーメモリ「Joker!」

翔太郎・フィリップ「変身！」

ダブルドライバー「Cyclone-Joker！」

「ジャジャーンジャジャーンチャララン！（ピロピロピロ…）」

「（サイクロン変身音&発光）」

「（ジャギーーン）バンバンバン！！」（ジョーカー変身音&発光）」

W・C「さて、アイツはどこだ？」

Wがモールファンガイアを探し始めた。俺もファンガイアハンターを前方に向け、用意していた。

モールファンガイア「フン！」

W・C「うわあ！」

モールファンガイアが不規則に地中に出てくるせいでファンガイアハンターは使えず、Wも防戦一方。

翔平「うわっ！」

今度は俺に攻撃を仕掛けてきた・・・？ヤツは俺を地面の中に引きずり込んだ。そしてきずいたときにはモールファンガイアはいなくなっていて、俺は霧に包まれた森の中にいた。そこには顔に包帯を巻いた女が立っていた。

翔平「あなたは？」

シュラウド「私はシュラウド」

翔平「シュラウド？」

シュラウド「あなたは松風翔平ね」

翔平「あつ、ああ」

シュラウド「あなたにこれを預ける」

目の前にはロストドライバーとペガサスのメモリが合った。

俺はロストドライバーとペガサスメモリを手に取った。

シュラウド「これを使って戦いなさい」

翔平「ちよつ、待って!」

目が覚めた。夢・・・だったのか？

W・C「うわあああ!」

Wがモールドーパントの地中からの攻撃に押されている。

翔平「このままじゃ負ける・・・!」

俺は自分の手にロストドライバーとペガサスメモリがあることに気付いた。

翔平「夢・・・じゃなかった?・・・今はこれを使うしかないか!」

俺はロストドライバーをつけた。

W・C「あれは、ロストドライバー?なぜ君が!?」「あれはおやっさんが使っていたのと同じベルト!」

ペガサスメモリ「Pegasus!」

翔平「变身！・・・えーとガイアメモリをこのドライバーに入れて・  
・」

ロストドライバー「Pegasus！」

俺の姿はみるみる天馬を思わせる姿になった。

ペガサス「仮面ライダー・・・ペガサス！」

モールファンガイア「それがどうした・・・よっ！」

モールファンガイアが攻撃してきた。

ペガサス「よっ！」

モールファンガイア「なにつ！」

ペガサス「へえ、空飛べるんだ。そりゃそうだよな、天馬だもん、」  
モールファンガイアは再び地中にもぐった。俺はペガサスマグナム  
(トリガーマグナムの白バージョン)を取り出した。

ズカンズカンズカン！

モールファンガイア「うわあ！」

ペガサス「あれっ、当たったの!？」

W・C・J「よし、マキシマムドライブだ！」

ペガサス「ん？ああ」

ダブルドライバー「Joker!マキシマムドライブ!」

ロストドライバー「Pegasus!マキシマムドライブ!」

Wはジョーカーエクストリームの準備を、俺はペガサスマグナムから円錐状の白い光を放ってモールドパントをポイントした（デлтаのルシファースハンマーを想像してください）。

W-CJ「ジョーカーエクストリーム!」

ペガサス「はあ!!!」

2人のライダーのマキシマムドライブをうけたモールドファンガイアは全身がステンドグラス状になり、粉々になった。

第10話・Mに負けるな／天国のカジノ（前書き）

第10話・・・もうここまで来たか

## 第10話・Mに負けるな／天国のカジノ

前回のあらすじ：

嶋「敵はファンガイアでもネオファンガイアでも、そしてガイアメモリで変身したドーパントでもなかったそうだね。」

翔平「はい、敵はステンドグラス状ではありませんでしたし、爆発してガイアメモリが排出されたわけでもありません。」

嶋「それはアンノウんだ。」

翔平「アンノウン!？」

嶋「ああ、1ヶ月前に全て消滅したと思われていた怪人のことだ。君は超能力の存在を信じているかね？」

翔平「超能力・・・」

翔平「あれっ？あいつどこいつて・・・」

フィリップ「松風翔平」

翔平「フィリップに翔太郎さん？」

翔太郎「さっきの怪物どこ行っただ？まあそれより行くぜフィリップ」

フィリップ「ああ翔太郎、」

サイクロンメモリ「Cyclone!」

ジョーカーメモリ「Joker!」

翔太郎・フィリップ「「変身!」」

ダブルドライバー「Cyclone-Joker!」

「ジャジャーンジャジャーンチャララン!」(ピロロピロロ…)

「(サイクロン変身音&発光)」

「(ジャギーーン)バンバンバン!」(ジョーカー変身音&発光)

翔平「あなたは?」

シュラウド「私はシュラウド」

翔平「シュラウド?」

シュラウド「あなたは松風翔平ね」

翔平「あつ、ああ」

シュラウド「あなたにこれを預ける。これを使って戦いなさい」

ペガサスメモリ「Pegasus!」



翔平「变身！・・・えーとガイアメモリをこのドライバーに入れて・  
・」

ロストドライバー「Pegasus！」

俺の姿はみるみる天馬を思わせる姿になった。

ペガサス「仮面ライダー・・・ペガサス！」

ダブルドライバー「Joker！マキシマムドライブ！」

ロストドライバー「Pegasus！マキシマムドライブ！」

Wはジョーカーエクストリームの準備を、俺はペガサスマグナムから円錐状の白い光を放ってモールドパントをポイントした（デルタのルシファーズハンマーを想像してください）。

W・C「ジョーカーエクストリーム！」

ペガサス「はあ！！！」

2人のライダーのマキシマムドライブをうけたモーフアンガイアは全身がステンドグラス状になり、粉々になった。

\*\*\*\*\*

2人のライダーのマキシマムドライブをうけたモーフアンガイア

は全身がステンドグラス状になり、粉々になった。俺とWは変身を解除した。

翔太郎「なあ、何でお前、ロストドライバーとガイアメモリを？」

フィリップ「誰からもらったんだい？」

俺は答えようとした。しかし、自分がなぜドライバーとメモリを持っているのか思い出せない。

翔平「分からない、気絶して目が覚めたらいつの間にかあったし」

翔太郎「そうか……」

現在

名護「イクササーイズ！俺は正しい！ついてきなさい、迎撃開始！」

俺はなぜかイクササイズをしている。

名護「腕ふりなさい　ふりなさい　早くしなさい　飛びなさい  
腕ふりなさい　ふりなさい　早くしなさい　飛びなさい  
腕ふりなさい　ふりなさい　早くしなさい　飛びなさい」

翔平「ふう、やっと終わった！」

正夫「けっこう……ハードだよな」

フィリップ「はあ……はあ……なぜ僕まで……」

翔平「えーと、そろそろラジオ始まるな」  
俺は持参してきたラジオを『園咲若菜のヒーリングプリンセス』の  
やってるにあわせた。

ラジオ「園咲若菜の、ヒーリングプリンセス！今日も元気120%  
でお送りします！」

翔平「これだけが心の癒しだよ・・・」

ラジオ「最初のコーナーは・・・風都ミステリーツアー！今回いた  
だいたおはがきは・・・なんと、風都にある謎のカジノ、ミリオン  
コロッセオです！風都のどこかにある謎のカジノ、一体どこにある  
んでしょうか」

フィリップ「ミリオンコロッセオか・・・」

そして鳴海探偵事務所に向かった

フィリップ「ただいま」

翔平「お邪魔しマース」

「何とかしてよ、翔ちゃん！」

フィリップ「どうしたんだい、翔太郎？」

翔太郎「ああ、実はかくかくしかじか」

フィリップ「なるほど、ミリオンコロッセオに・・・」

鳴海探偵事務所に依頼が来た。どうやら自分の娘がミリオンコロッセオに行ってから性格ががらりと変わったらしい。娘を何とかしてくれっ、てことだな。

翔太郎「ミリオンコロッセオね、まあまずその娘を尾行するか、」  
翔太郎さんと亜樹子さんは出かけていった。

翔平「俺もなんかやろうかな、フィリップはなんかしねーの？」

フィリップ「僕は知らせを元に検索するまでさ、」

翔平「ふーん、じゃ俺も捜査ですっかな、暇つぶしに」

俺は学校に向かった。何故かって？仮面ライダーフォーゼでおなじみのJKにミリオンコロッセオのことについて聞くためさ！

翔平「よージェイク」

ジェイク「翔平センパイ！どうしたんですか、こんなところに？」

翔平「情報が欲しいんだ、ミリオンコロッセオについて、」

そういうと俺は1000円札を出してジェイクに渡した。そしてジェイクはあたりをキョロキョロしてから行った。

ジェイク「まず、ミリオンコロッセオについて説明しよう。ミリオンコロッセオって言うのは、風都にある大きなカジノのことだ。このカジノにいったものは性格が激変し、金に目がなくなってしまっ  
んだ。」

翔平「それ以外には？」

ジェイク「そこまでは・・・ちよつと・・・なー」

俺はさらに1000円札を出してジェイクに渡した。そしてジェイクはまたあたりをキョロキョロしてから行った。

ジェイク「ひゅー・・・いや、どーもそのカジノを開いている主催者とカジノの勝負をしたヤツは金を失って、意識がなくなるらしいんだよ、」

翔平「そこへの生き方は？」

ジェイク「色々あるが・・・一番有力なのはバスらしい。」

翔平「ふーんなるほどな、ありがとな」

そして俺は学校を後にした。

ジェイク「ちよつ、これだけ！？もつと聞いてよ！そして金を、くれっ」

生徒「ジェイク！」

ジェイク「何だよ、同情するなら金をくれ！」

生徒「やるよ、それより保健室の先生の攻略法、教えて！」

ジェイク「まず、体調が悪いと保健室に迎え、それから・・・

場所は変わり風都バス前

翔平「ここかな？あつ、翔太郎さん」

俺は一人の女を尾行していた翔太郎さんと亜樹子さんを見た。

翔太郎（わっ、お前、しっ！）

亜樹子「アーツ！見失った！」

\*\*\*\*\*

翔平「ごめんなさい」

翔太郎「もういいよ、それより情報をつかんだって本当か？」

翔平「はい、ミリオンクロスセオはどうやら風都バスで行くらしいんです。翔太郎さんが追っていた人が消えた直後にバスが通ったのが見えたことを考えると、ほぼ100パーセントでしょう、俺は明日、今日と同じ時間帯にここ来てみます」

そして次の日

翔平「ふーん、この時間帯かな」

そしてさらに人が来た。中に翔太郎さんが追っていた人もいた。

翔平「あっ、バスきた。」

そしてバスが来た。

乗ったはいいけど、どこ行くんだ？

バスはトンネルで止まった。そしてみんな降りた。・・・降りた？  
ここが、ミリオンクロスセオ！？

第10話・Mに負けるな／天国のカジノ（後書き）

今回のモトネタ：仮面ライダーW 9月20日放送 第3話

Mに手を出すな / 天国への行き方



## 第11話・Mに負けるな/金の表裏

前回のあらすじ：

名護「イクササイズ！俺は正しい！ついてきなさい、迎撃開始！腕ふりなさい　ふりなさい　早くしなさい　飛びなさい！」

ラジオ「園咲若菜の、ヒーリングプリンセス！今日も元気120%でお送りします！」

翔平「これだけが心の癒しだよ・・・」

ラジオ「最初のコーナーは・・・風都ミステリーツアー！今回いただいたおはがきは・・・なんと、風都にある謎のカジノ、ミリオンコロッセオです！風都のどこかにある謎のカジノ、一体どこにあるんでしょうか」

翔平「情報が欲しいんだ、ミリオンコロッセオについて、」

ジェイク「まず、ミリオンコロッセオについて説明しよう。ミリオンコロッセオって言うのは、風都にある大きなカジノのことだ。このカジノにいったものは性格が激変し、金に目がなくなってしまっんだ。」

翔平「ごめんなさい」

翔太郎「もういいよ、それより情報をつかんだって本当か？」

翔平「はい、ミリオンクロスセオはどうやら風都バスで行くらしいんです。翔太郎さんが追っていた人が消えた直後にバスが通ったのが見えたことを考えると、ほぼ100パーセントでしょう、俺は明日、今日と同じ時間帯にここ来てみます」

\*\*\*\*\*

翔平「ここが、ミリオンクロスセオ。俺も何かしようかな」

ジャララララララララ

翔平「ルーレットか・・・」

賭け人A「黒の19！」

賭け人B「赤の12！」

翔平（いや・・・黒の19だな・・・）

玉は俺の予想通り、黒の19に入った。

賭け人B「くそー、もうあとがねえー！」

翔平「それ、俺が引き受けていい？」

賭け人B「はあ？」

翔平「もしだめだったら金返しますか・・・2倍で」

そういうと賭け人Bは席を譲ってくれた。

賭け人A「ガキが勝てるとでも？」

翔平「それよりさつさと始めようぜ」  
ルーレットは回り始めた。

翔平「・・・・・・赤の24だ、赤の24に全額かけよう」

賭け人A「フン、たいした自身だな・・・黒の21！」  
ルーレットが止まる・・・玉が入ったのは・・・

赤の24

賭け人A「何!？」

翔平「やり」

????「みなさんようこそ。夢のカジノ、ミリオンクロスセオへ、  
私がオーナーの加賀泰造かがたいぞうです。」

翔平「ふーん、アイツがオーナーか、」

加賀「私への挑戦権を獲得したものが、また、現れた。」

フィリップ「なるほど、彼がマネーのメモリを持つものか。」

翔平「フィリップ！いたの？つか、マネーのメモリってアイツもドーパント？」

フィリップ「ああ、昨日ヤツと出くわしてねWに変身して戦ったんだ。あつ、ちなみに翔太郎や亜樹ちゃんも来ているから。」

加賀「その勇気あるチャレンジャーの名前は……和泉優子<sup>いずみ ゆうこ</sup>！」

和泉優子の挑戦が始まった。まあ、原作どおり和泉優子は負け、加賀はマネーメモリを使ってマネードーパントに変身したけど。

和泉優子「待つて、今度こそ私につきが来る！」

マネードーパント「負け犬のクズはみんなさういう、確か両親の店が破産寸前……だったかな？」

こうして、和泉優子の意識はコイン中に、

マネードーパント「ふふふ……ふはははは……ぶほ……！」

亜樹子さんのスリッパが加賀に炸裂。

亜樹子「アンタ、人を何だと思っているのよ！」

以下省略

翔平「で、何で俺なのかな!？」

翔太郎「悪い、フィリップが動かなくて」

フィリップ「・・・家族・・・家族・・・家族・・・」

翔平「分かりました。まあ、とりあえず、黒の16あたりで、」

加賀「なら私は赤の23だ」

ルーレットは止まり、黒の16に玉は入った。

翔平「やり、後一回勝てばOKだな」

加賀「くっ、このままだと・・・!」

マネーメモリ「MONEY!」

翔平「うわっ、変身した」

翔太郎「フィリップ、行くぞ」

フィリップ「・・・」

翔平「家族の事か」

翔平「家族のことは今考えるな・・・お前には翔太郎さんみたいな  
I、・・・仲間がいるだろ」

フィリップ「！」

翔平「まあいいさ、さて行きますか」

ペガサスメモリ「Pegasus！」

翔平「変・・・身！」

ロストドライバー「Pegasus！」

ペガサス「仮面ライダーペガサス、行くぜ！」

そして俺は逃げていったマネードーパントを飛んで追いかけた。

フィリップ「翔太郎・・・」

翔太郎「なんだ？」

フィリップ「いこう」

サイクロンメモリ「Cyclone！」

翔太郎「ああ」

ジョーカーメモリ「Joker!」

フィリップ・翔太郎「変身!」

ダブルドライバー「Cyclone-Joker!」

「ジャジャー ジャジャー チャララン! (ピロロピロロ…)

」 (サイクロン変身音&発光)

「 (ジャギーン) バンバンバン! 」 (ジョーカー変身音&発光)

一方マネードーパントは

マネードーパント「はあ・・・はあ・・・疲れた」

ペガサス「めーっけ」

マネードーパント「何! 飛ぶのなんかあるか! 」

ペガサス「アリアリ、マジアリ。」

マネードーパント「だが一人で私を倒せるかな」

ペガサス「大丈夫、ちゃんとお仲間いるから」

マネードーパント「何? 」

ブロロロロロロロロ ハードボイルダー・スタートダッシュモ  
ドが走る音

W・C J「ハードボイルダー・スタートダッシュモードに乗ってやってきた。」

W・C J「よう、マネーのおっさん」「またせたね」

マネードーパント「マネーのおっさん！？貴様、家族はどうした！」

W・C J「家族・・・大丈夫さ、僕には頼りないけど、・・・家族みたいな人たちがいるから、」

ヒートメモリ「Heat！」

メタルメモリ「Metal！」

ダブルドライバー「Heat-Metal！」

ペガサス「よっし、そろそろ決めますか」

W・H M「ん？ああ」

メタルシャフト「Metal！マキシマムドライブ！」

鉄棒か、俺にも似たようなの無いかな？あつ、剣あった。おまけにメモリ入れるスペースもあった。

ペガサスブレード「Pegasus！マキシマムドライブ！」

W・H M「メタルブランディング！」



ペガサス「必殺技の名前・・・よしっ！ペガサス・スターダスト！」

マネードーパント「ぐわあああ！！」

マネーメモリは壊れた。しかし、俺の攻撃はまだ終わっていないので、加賀に当たった。

加賀「ぐわあああ！！」

ペガサス「あっ・・・・・・・・・・」

W・HM（ひどいね）

ペガサス「じゃっ」

W・HM「おい！」「せめて悪びれたらどうだい！？」  
俺はさっそうと飛んで帰った

## 次の日

キンコンカンコン

放送「来週、全学年共通でテストがあります、」

翔平「へえー」

正夫「なんだろう」

放送「このテストは学力ごとにクラスわけをするためのテストです。ちなみに風邪で休んだら、最下級のクラスになります。」

バカ・アホな生徒達「「「「「「「「「えー！！！！」」」」」

翔平「はあ!？」

正夫「なぜに!」

続く

## 第11話・Mに負けるな／金の表裏（後書き）

翔平「こおおらあ、作者！なんのつもりだ！！」

正夫「僕、設定では勉強できない設定でしょ！？どうするんだよー  
ー！！」

翔平「いやっ、それはまじめに勉強しろ」

奇跡的な人間「いやゝ実はさあ、この小説って仮面ライダーやさまざまなアニメが混合・融合した世界って設定でしょ」

正夫「まあ、そうだね」

奇跡的な人間「でも今のところ、仮面ライダーが混合した世界だから・・・」

翔平「だから？」

奇跡的な人間「バカとテストと召喚獣につ！を混合・融合させるんだ！」

翔平・正夫「はああああー！！！？？」

奇跡的な人間「と、言うわけで、次回第12話、ご期待ください！」

翔平「勝手に閉めるなー！！！！！！」

## 第12話・バカと観察処分者とFクラス（前書き）

前回のあとがきの続き：

翔平「でつ、本当に『バカとテストと召喚獣につ！』が混ざってくるとはな・・・」

奇跡的な人間「いやゝにぎやかになるね！」

翔平「逆に怖ーよ！あそこらへんのキャラ、毒物料理作るヤツもいれば、スタンガンで気絶させてグロイ映画見せさせるヤツいるし・・・」

奇跡的な人間「そうかな？」

翔平「お前はいいよな・・・ただ小説を考えて書くだけだから・・・どうせ、俺なんかは・・・半殺しに会うのが関ノ山さ・・・」

奇跡的な人間「ちょっと矢車さんモードオフにして！今回ライダー出てこないんだから（あらずじ以外）！それじゃあ、張り切ってスタート！」

翔平「・・・どうせ俺なんか」

## 第12話・バカと観察処分者とFクラス

前回のあらすじ：

賭け人A「黒の19！」

賭け人B「赤の12！」

賭け人A「ガキが勝てるんでも？」

翔平「それよりさつさと始めようぜ

翔平「・・・・・・・・赤の24だ、赤の24に全額かけよう」

賭け人A「フン、たいした自身だな・・・・・・・・黒の21！」

翔平「家族のことは今考えるな・・・・・・・・お前には翔太郎さんみたいな  
・・・・・・・・仲間がいるだろ」

フィリップ「！」

翔平「まあいいさ、さて行きますか」

ペガサスメモリ「Pegasus！」

翔平「変・・・・・・・・身！」

ロストドライバー「Pegasus!」

ペガサス「仮面ライダーペガサス、行くぜ!」

フィリップ「いこう」

サイクロンメモリ「Cyclone!」

翔太郎「ああ」

ジョーカーメモリ「Joker!」

フィリップ・翔太郎「変身!」

ダブルドライバー「Cyclone-Joker!」

ヒートメモリ「Heat!」

メタルメモリ「Metal!」

ダブルドライバー「Heat-Metal!」

メタルシャフト「Metal!マキシマムドライブ!」

ペガサスブレード「Pegasus! マキシマムドライブ!」

W・H・M「メタルブランディング!」

ペガサス「必殺技の名前・・・よしっ! ペガサス・スターダスト!」

キンコンカンコン

放送「来週、全学年共通でテストがあります、」

翔平「へえー」

正夫「なんだろう」

放送「このテストは学力ごとにクラスわけをするためのテストです。ちなみに風邪で休んだら、最下級のクラスになります。」

バカ・アホな生徒達「「「「「「「「「「「「えー!」」」」」」」」」」」」

翔平「はあ!？」

正夫「なぜに!」

\*\*\*\*\*

バカ・アホな生徒達「「「「「「「「「「「「えー!」」」」」」」」」」」」

「「「「「」」」」」」

翔平「はあ!？」

正夫「なぜに!」

放送「実は先月、この学校に画期的なシステムを導入しました。その名も「試験召喚システム」。科学とオカルトと偶然によって開発された、この試験召喚システムを試験的に採用し、学力低下が嘆かれる昨今に対応するため、本校ではいち早くこのシステムを導入しました。「試験召喚システム」とは試験の点数に応じた強さを持つ「召喚獣」を使用した戦争「試召戦争」でクラス全体で勝ち上がる、簡単に言つとゲームみたいな物です。」

翔平「へえー、おもしろそつ、」

そして1週間後

先生「では始めてください」  
テストが始まった。

姫路「はあ・・・はあ・・・

？

姫路「はあ・・・はあ・・・、うつ、うつ・・・」

明久「姫路さん!」



翔平「あつ、」

隣の席の姫路<sup>ひめじ</sup> 瑞希<sup>みずき</sup>が倒れた。それをもう片方の隣の席の吉井<sup>よしい</sup> 明<sup>あき</sup> 久<sup>ひさ</sup>が助けた。顔が赤いな・・・熱だな。

翔平「先生、姫路さんが倒れたんですけど・・・」

先生「途中退席者は、得点を無とする。」

翔平「あなたは生徒が熱を出しているのにほうっておくんですか！？」

先生「それがルールだ、」

翔平「・・・先生、姫路さんを保健室へ連れて行くので、途中退席します。」

先生「松風・・・そうした場合、お前の得点も無得点になるがいいのか？」

翔平「・・・ええ、かまいませんよ、その前に・・・オラァ！！！」

先生「ぐふっ！」

俺は先生に腹パンをお見舞いした。

翔平「でもあんたのその態度は気に入らなくてね。だからあなた生徒から評判悪いんですよ。・・・つつても、気絶している人間に何言っても意味ないか・・・」

明久「なあ、俺も手伝うよ！」

翔平「ん？いいのか、途中退席は無得点だぜ。」

明久「うつ、」

翔平「お前はここでテスト受けてな、後は俺何とかすつから」

さてと・・・姫路さん、保健室に連れて行くか。

場所は保健室

ガラガラガラ 扉を開ける音

明久「あつ、まだ起きてない？」

翔平「あつ、テスト終わったの、どうだった？」

明久「ま、まあまあかな」

姫路「うつ、うつうつ」

明久「あつ、起きた？」

姫路「ここは・・・？」

翔平「保健室だよ、テストの最中に倒れちゃったから、」

ガラガラガラ 扉を開ける音

明久「あつ、鉄人」

翔平「ミスタージャイアントロボさん、どうしたんですか」

西村「だれが鉄人だ、だれがジャイアントロボだ。俺には西村にしむら宗そう一いちという名前がある！」

翔平「まあまあ・・・それよりなんですか？」

西村「ん、テストの結果を私に來た。」

明久「えつ、ホントですか!？」

翔平「あつ、いいつす。多分俺、明久といっしょだと思っんで」

明久がもらった封筒の中に入っていた紙に書かれた文字は・・・

Fクラス』

西村「ちなみに吉井、お前は欠席して無得点になったやつ以外で、お前は最も点数が悪かったので、お前にこの称号を与える。」

西野は明久にさらにもう一枚封筒を渡した。その封筒に入っていた紙に書いてあった文字は

『観察処分者』

観察処分者・・・それは学生生活を営む上で問題のある生徒に課せられる処分。基本的には教師の雑用係でありバカの代名詞である。

西野「そうだ、松風、お前にこの称号を与える。」

俺も封筒を渡された。その中の紙に書いてあるのは観察処分者を越える称号・・・

#### 『黒の完全処分者』

黒の完全処分者・・・面倒なので後ほど説明シマス。

明久「・・・orz」

翔平「そう落ち込むなって。じゃあ姫路さん、早速俺たちその・・・2年F組に行ってくるわ。体調よくなったら来てね。」

俺は最初に渡された封筒を破り、中身を確認しながら、2年F組のある旧校舎に向かった。

まあ、確認しなくても俺がFクラスであることに変わりはないが。

## 第12話・バカと観察処分者とFクラス（後書き）

奇跡的な人間「というわけで、今回の話で初登場の、吉井明久さんと姫路瑞希ちゃんです！」

明久「どーも」

姫路「よろしくお願いします」

翔平「まあ、仲間が増えてうれしいが、黒の完全処分者ってなんだ？」 前書きから復活した。

奇跡的な人間「まあ、今のところ、観察処分者より悲惨な称号で、そのおかげで召喚獣が物を触れられて、痛みが召喚者に帰ってくるほか、黒金の腕輪を持っているってことぐらいかな」

翔平「もうほとんど確定じゃん！」

奇跡的な人間「と、言うわけで次回をお楽しみに！」

翔平「じゃ、じゃーねー！」

明久（僕達、この中でちゃんとやっていけるかな）

姫路（正直不安になってきました・・・）



### 第13話・俺とバカ達と召喚戦争（前書き）

奇跡的な人間「うーん」

明久「どうしたの」

奇跡的な人間「いやー、仮面ライダーのほうでも<sup>オース</sup>000を参戦させようと思うんだけど、そうするとタイトルがややこしくなるんだよねー。そしたら下手したらどっちか消さない取っと思うんだよね、」

翔平「ふーん、好きにしたら」 今世紀最大の棒読み

明久「お前はいいよ！一応この小説の主人公だから消えなくてすんで！僕は・・・」

姫路「それに<sup>オース</sup>000いれるなら、『A t o z / 運命のガイアメモリ』の少し前ぐらいがいいと思います！」

奇跡的な人間「うーん・・・そうだね<sup>オース</sup>000だすのもう少し待ってみるよ」

翔平「ツーわけで、スタート！！！！」 ものすごい早口

奇跡的な人間「勝手にやらないでー！」

### 第13話 - 俺とバカ達と召喚戦争

前回のあらすじ：

放送「実は先月、この学校に画期的なシステムを導入しました。その名も「試験召喚システム」。科学とオカルトと偶然によって開発された、この試験召喚システムを試験的に採用し、学力低下が嘆かれる昨今に対応するため、本校ではいち早くこのシステムを導入しました。「試験召喚システム」とは試験の点数に応じた強さを持つ「召喚獣」を使用した戦争「試召戦争」でクラス全体で勝ち上がる、簡単に言つとゲームみたいな物です。」

先生「では始めてください」

姫路「はあ・・・はあ・・・、うっ、うっ・・・」

明久「姫路さん！」

翔平「あつ、先生、姫路さんが倒れたんですけど・・・」

先生「途中退席者は、得点を無とする。」

翔平「・・・先生、姫路さんを保健室へ連れて行くので、途中退席します。」



先生「松風・・・そうした場合、お前の得点も無得点になるがいいのか？」

翔平「・・・ええ、かまいませんよ、その前に・・・オラア！！！」

先生「ぐふっ！」

翔平「でもあんたのその態度は気に入らなくてね。だからあなた生徒から評判悪いんですよ。・・・つつても、気絶している人間に何言っても意味ないか・・・」

ガラガラガラ 扉を開ける音

明久「あつ、鉄人」

翔平「ミスタージャイアントロボさん、どうしたんですか」

西村「だれが鉄人だ、だれがジャイアントロボだ。俺には西村<sup>にしむら</sup>宗<sup>そう</sup>  
<sup>いち</sup>一という名前がある！」

明久がもらった封筒の中に入っていた紙に書かれた文字は・・・

Fクラス』

☐

西村「ちなみに吉井、お前は欠席して無得点になったやつ以外で、お前は最も点数が悪かったので、お前にこの称号を与える。」

西野は明久にさらにもう一枚封筒を渡した。その封筒に入っていた紙に書いてあった文字は

『観察処分者』

西野「そうだ、松風、お前にこの称号を与える。」

俺も封筒を渡された。その中の紙に書いてあるのは観察処分者を越える称号……

『黒の完全処分者』

\*\*\*\*\*

黒の完全処分者……それは観察処分者を越える称号。『黒の』とは、完全処分者は、『黒』と『白』、両方存在し、黒の完全処分者は、観察処分者のように雑用をこなすため、召喚獣を特例として物に触れることができるが、召喚獣の受けた痛みや疲労は召喚者にフィードバックされる。おまけに黒金の腕輪を使用することが許された称号。

明久「……orz」

翔平「そう落ち込むなつて。じゃあ姫路さん、早速俺たちその・・・  
2年F組に行ってくるわ。体調よくなったら来てね。」

しばらく歩いていると、成績最上級のクラス、2年A組の教室が見えてきた。

翔平「ほえー・・・」

明久「スゲー・・・システムディスクにリクナイディングシート・・・！」

翔平「ノートパソコン支給に、・・・フリードリンクサーバーだ！」

明久「俺たちの教室もあんなのだったらいいな・・・」

翔平「そうだな・・・あつ、霧島だ・・・あいつやっぱここ（Aクラス）か・・・」

俺は教室の中にいた霧島翔子きりしましょうこを見た。

翔平「じゃつ、そんな俺たちの希望を胸に、Fクラスに行きますか！」

さらにBクラス、Cクラス、Dクラスが見えてきた。

翔平「なんか、どんどん設備が悪くなっているような・・・」

明久「きつ・・・気のせいだよ！・・・多分」

Aクラス、Bクラス、Cクラス、Dクラスがある新校舎を抜けると、どう見ても使えそうに無いおんぼろな旧校舎が見えてきた。

翔平・明久「……orz」

翔平「Eクラスまでは……Eクラスまでは許せたよ……」

明久「さすがにこれはねえーよ……」

俺たちのクラス、Fクラスは、どこもかしこも壊れていて、畳、机はちゃぶ台で代用、いすはぼろぼろの座布団で代用している。どこもかしこも壊れていて、女子なんてどこにもいない……。あつ、やつぱ一人……。いや二人いた。

翔平「くそつ、これが各社社会つてヤツか……」

福原「二人とも、席についてください」

明久「はい……」

翔平「ふぁーい！席はどこですか、」

福原「好きな席にどうぞ。」

明久「席も決まっていないの！」

にしてもこの教室Fクラスは学力最低ランクの女に飢えた野郎共のテリトリーみたいなものだから……スッゲー気持ち悪くなってきた。

福原「どーも、私がこのクラスの担任の福原慎ふくはらしんです。よろ……福原が言いかけっていると、席が壊れた。

福原「工具箱を取ってきます。」

翔平「・・・あつ、俺のも壊れた。」

雄二「ボンドなら後ろにあるぞ」

翔平「あつ、ありがと・・・えつ、雄二もこのクラス!?」  
さかもとゆうじ  
坂本雄二はご親切にボンドの場所を教えてくれた。

雄二「俺だけじゃないぜ」

美波「ハロハロ」

明久「島田さん!そっか、やっぱり島田さんはFクラスだよね!」

美波「「怒」それってどういう意味!内がバカだとも言いたいの!!」

翔平「まあまあ・・・関節技決めていると、いつまでたっても・・・  
ていうか一生答えてくれないと思うよ!!」

明久「胸が無いからものすごく痛む・・・」

ブチ マジ切れモードになった音

ドカア!!!! 明久が美波にぶん殴られる音

ゆらっ 美波のスカートが風に揺らいた音

ムツツリーニ「！」

キラーン ムツツリーニ（土屋<sup>つちや</sup> 康太<sup>こうた</sup>）の眼が輝いた音

ムツツリーニ「みつ、見えそうで、見え・・・」

美波「ウチは帰国子女で日本語がうまく読めないのよ、」

秀吉「あいからわずにぎやかじゃのう」

明久「痛つつつつつ・・・秀吉？」

秀吉「わしもＦクラスじゃ、よろしくのう」

がらがらから ドアの扉が開いた音

正夫「はあ・・・はあ・・・遅れました！」

翔平「あつ正夫、どうしたんだ？」

正夫「いやちよつと、この校舎歩いていたら、いきなり穴あいて・・・  
・抜けるのにすごい体力使ったんだ・・・」

翔平「ふーん、そーっ」 ものすごい棒読み

正夫「なにっ、その反応!？」

翔平「あーっ、いやっお前もやっぱりＦクラスなんだなって思っ

正夫「それひどいよ!」一応勉強したんだから!」

フィリップ「君達少し静かにしたまえ」

明久「あれっ、フィリップなんでFクラスなの!？」

明久はなぜ驚いているのかというと、フィリップはテストではいつも100点を取っているからだ。・・・まあ、先生への態度はあれなので内申は最悪なのだが。

雄二「居眠りしていたからだろ、あいつ一番前の席で、明久は後ろだから分らないか。」

雄二の言葉で明久は、ああなるほど、といったが実はフィリップはテストの時間中、Wに変身していたので、意識は翔太郎のところにいて、体は空になっていたからだ。

秀吉「Fクラスはこれで全員か？」

翔平「いやっ、あと一人来るはずだぜ。」

がらがらから ドアの扉が開いた音

姫路「遅れました!」

明久「姫路さん!もう体は大丈夫なの?」

姫路「はい、ご迷惑おかけしました。」

翔平（これで全員そろったか・・・少し寝るか。）

姫路「あっ、あの、松風さんもうありがとうござい・・・」

翔平「くかー、」

姫路「あつ寝ていますか」

雄二「なあ、みんな聞いてくれ！」

俺はこのときまだ気付いていなかった・・・Fクラスが試験召喚戦争を他のクラスに仕掛けるということを・・・俺は気持ちよく寝ていた・・・



## 第14話・俺と召喚獣と黒い腕輪（前書き）

バカテスト b a k a t e s t

問題：紀元前202年に中国を統一したのは『漢』ですが、『漢』の前に中国を支配していたのは何ですか？

姫路瑞希の答え

秦

教師のコメント

正解です。特にありません。

吉井明久の答え

カタカナ

教師のコメント

それは漢字です。

松風翔平のコメント

三＋人＋ノ＋木＝秦

教師のコメント

バカでも理解できそうな答えですね。後で吉井君に教えてください。

松風翔平のコメント

明久、どんな答えでしたんですか??



## 第14話・俺と召喚獣と黒い腕輪

前回のあらすじ：

明久「スゲー・・・システムディスクにリクナイディングシート・・・！」

翔平「ノートパソコン支給に、・・・フリードリンクサーバーだ！」

明久「俺たちの教室もあんなのだったらいいな・・・」

翔平「そうだな・・・あつ、霧島だ・・・あいつやっぱここ（Aクラス）か・・・」

翔平「くそつ、これが各社社会ってヤツか・・・」

福原「二人とも、席についてください」

明久「はい・・・」

翔平「ふぁーい！席はどこですか、」

福原「好きな席にどうぞ。」

明久「席も決まっていらないの！」

秀吉「Fクラスはこれで全員か？」

翔平「いやっ、あと一人来るはずだぜ。」

がらがら ドアの扉が開いた音

姫路「遅れました！」

明久「姫路さん！もう体は大丈夫なの？」

姫路「はい、ご迷惑おかけしました。」

翔平（これで全員そろったか・・・少し寝るか。）

姫路「あっ、あの、松風さんありがとうござい・・・」

翔平「くかー、」

姫路「あっ寝ていますか」

\*\*\*\*\*

雄二「なあ、みんな聞いてくれ！」

俺はこのときまだ気付いていなかった・・・Fクラスが試験召喚戦争を他のクラスに仕掛けるということを・・・俺は気持ちよく寝ていた・・・

数分後

明久「おきてっ、おきてっ！」

雄二「仕方ない・・・島田、起こしてやれ」

美波「はい・・・それっ！」

どかん！！！！ 俺が美波に関節技決められた音

翔平「おごは！！！！」

雄二「まだ起きないか・・・もっとや・・・」

翔平「ギブギブギブギブギブ！！！！！！起きているから！！！！」

雄二「起きたか・・・では明久、松風、前に出てくれ」

明久「オーケー」

翔平「まっ、待って・・・体が痛んで動けないんですが・・・」

明久「あー分かった、つれてくよ」

翔平「あっ、待ってそこ特にいたm・・・痛つつつつつつ！！！！！！」

明久「あつ、ごめん」

雄二「みんな、聞いてくれ！この吉井明久は観察処分者の称号を持ち、松風翔平はその上を行く、黒の完全処分者の称号を持っている！まず、みんなにこの二つの照合について説明してやってくれ。」

明久「えっ、じゃあ僕は観察処分者について説明します。観察処分者って言うのは、学生生活を営む上で問題のある生徒に課せられる処分のことで、召喚獣を物に触れることができる能力が付きます。」

F組「おお」

明久「ただその分、召喚獣の受けた痛みや疲労は召喚者に戻ってくるから最悪らしいです。物体に触れる能力のせいで基本的には教師の雑用係みたいなものです。」

秀吉「ついでにいうとバカの代名詞じゃな、」

翔平「えーと、痛！・・・黒の完全処分者って言うのは・・・基本的に観察処理者となんら変わらないんで前略。・・・ついでに黒金の腕輪が使えるだけ、」

そう言つと、姫路さんがゆっくりと手を上げた。

姫路「あー・・・」

翔平「ん？何？」

姫路「黒金の腕輪ってなんですか？」

翔平「えーと・・・みんな召喚獣を召喚するには先生の許可が必要  
って知っているよね・・・」

明久「えっ、そうなの!？」

翔平「・・・orz、・・・そうなんだけど、この黒金の腕輪を使  
うと先生の許可無く召喚獣を召喚することができる、スーパァイ  
テムなんです!」

F組「うをーー」

翔平「つーわけで早速使ってみたいと思ひやす。えーと、科目は何  
がいい？」

ムツツリーニ「・・・保健体育で!」

翔平「分かった保健体育な・・・ふう・・・起動『アウェイクン』  
!！」

俺の左腕に装着してある黒金の腕輪からムツツリーニ指定の保健体  
育の召喚フィールドが作成された。

F組「おおお」

翔平「じゃー続けて・・・サモン!」

俺は召喚獣を呼び出すキーワードをどこぞの鍵を使って変身する海  
賊戦隊の持つ『モイレーツ』からでる声のようにカッコ良く叫ん  
だが・・・

翔平（召喚獣）「へっ、へへへ・・・」

俺の召喚獣は真っ白になりながら床に這い蹲っていた。今にも「燃えた・・・燃え尽きたよ・・・真っ白になっ」って言いそうだ。

姫路「どうしたんですか？」

翔平「あつ、俺途中退席したから得点無効になっていたんだった。ははは・・・」

雄二「まあ、それはおいといて・・・話を戻す、誰かEクラスに宣戦布告していつてくれ！」

翔平「え得ええええ絵えええー！！！！初耳なんですけど！！！！」

秀吉「寝取ったからのう・・・」

正夫「それとそこ・・・「得」とか「絵」とかじゃなくてふつうに「え」だから」

美波「でも行くとしたら・・・」  
みんなの視線は明久に・・・

明久「何で僕なの！？」

姫路「あのー私が行きましようか？」

翔平「それはダメ！何されるかわかんないよ！？」

姫路「そうですか・・・」





雄二「なあ松風、（宣戦布告）たのめるか？」

翔平「ああ・・・ムツツリーニ、君の死は無駄にしない！行くぞ、明久！！」

明久「えっ、ちょっと待ってなんで僕まで・・・たすけて・・・助けてー！！！！」

Fクラス一同「がんばれー」 みんな棒読み

そして結局

明久「思いつきり殴られたよっ！ねえ！」

秀吉「それよりわしは松風が無傷なのか気になる・・・」

翔平「まあいいじゃないの、」

明久「よくないよ！人を盾にしといて！」

翔平「Eクラスとの試験召喚戦争まで後2日、張り切っていいこー」

Fクラス一同「おー！」

明久「無視しないでえー！！」



## 第15話・FとEと召喚戦争（前書き）

バカテスト b a k a t e s t

問題：あなたはこの学校の試験召喚システムのことをどう思いますか。

姫路瑞希の答え

争いをするのは良くないと思います。

教師のコメント

姫路さんの言うようによくないかもしれませんが、これも授業のいっかんです。それにこのシステムによって結束力が高まると思いますよ。

吉井明久の答え

雑用係 反対

教師のコメント

ならもつと勉強しましょう。

吉井明久のコメント

無理ッス

ムツリーニの答え

チャンスがあればパンチラを撮りたい・・・

教師のコメント

コメントしづらいです

紅正夫の答え

学費が安くなって最高です！

教師のコメント

このシステムによって多くのスポンサーが付いて学費が安くなりましたが、あなたの喜ぶポイントはそこですか！？

松風翔平の答え

趣味にしたいほど面白い

教師のコメント

具体的にどこが？

松風翔平の答え

俺の分身である召喚獣が他の召喚獣を痛めつけるところがなんとも  
いえない。本物やると色々メンドーだから。これ見てストレス解消。

教師のコメント

あなたは鬼ですか

## 第15話・FとEと召喚戦争

前回のあらすじ：

雄二「みんな、聞いてくれ！この吉井明久は観察処分者の称号を持ち、松風翔平はその上を行く、黒の完全処分者の称号を持っている！まず、みんなにこの二つの称号について説明してやってくれ。」

明久「えっ、じゃあ僕は観察処分者について説明します。観察処分者って言うのは、学生生活を営む上で問題のある生徒に課せられる処分のことで、召喚獣を物に触れることができる能力が付きます。ただその分、召喚獣の受けた痛みや疲労は召喚者に戻ってくるから最悪らしいです。物体に触れる能力のせいで基本的には教師の雑用係みたいなものです。」

秀吉「ついでにいうとバカの代名詞じゃな、」

翔平「えーと、痛！・・・黒の完全処分者って言うのは・・・基本的に観察処理者となんら変わらないんで前略。・・・ついでに黒金の腕輪が使えるだけ、」

姫路「黒金の腕輪ってなんですか？」

翔平「えーと・・・みんな召喚獣を召喚するには先生の許可が必要って知っているよね・・・」

明久「えっ、そうなの！？」

翔平「・・・orz、・・・そうなんだけど、この黒金の腕輪を使うと先生の許可無く召喚獣を召喚することができる、スーパーアイテムなんです!」

ムツツリーニ「くわっ!」びくびくびくびく

翔平「ムツツリーニ!ムツツリーニ!しっかりしろ!しっかりするんだ!」

ムツツリーニ「み・・・・・・・・み・・・・・・・・。」

翔平「しゃべるんじゃない!今、今医者と呼ぶから・・・!」

秀吉「普通に保健室に行った方が早いのではないか?」

ムツツリーニ「みつ・・・・・・・・みつ・・・・・・・・う・・・・・・・・。」

翔平「どうしたんだムツツリーニ!?言ってみろ!?!」

ムツツリーニ「み・・・・・・・・水色・・・・・・・・。」（バタリ）

翔平「ムツツリーニ!!!!!!!!!!!!!!」

誰か・・・誰か助けてください!!!!!!!!!!!!!!」

\*\*\*\*\*

side 翔平

翔平「ふぁー、今何時だ？」

俺は時計を見た。まだ時間大丈夫だな。

翔平「いつてきまーす、つっても誰もいないか・・・」  
実を言うと俺は一人暮らしをしている。

ボタン！ ドアを閉める音。

翔平「あつ、明久」

明久「あつ、翔平」

翔平「お前もこのアパートの住人なの？」

明久「お前もそうだったの!？」

翔平「なあ、俺の愛車に乗っていかないか？」

明久「愛車って車!？」

翔平「ちげーバイクに決まっているだろ」

俺たちは駐車場に向かった。俺の愛車は・・・イクサリオンII。  
先日嶋さんにもらった。

明久「お前、バイクの免許持っていたの？」

翔平「当たり前だ・・・ほら」



俺は財布から免許証をだして、明久に見せた。

翔平「なっ、・・・これ、俺のスピアのヘルメット貸すから後ろ乗れよ、」

明久「あっ、でも俺、やっぱいいや」

翔平「ふーん、そう・・・でも歩いていくと確実に遅刻だぜ。」

明久「えっ、時計見せて、」

翔平「ほら」

明久「・・・乗せていつてください」

翔平「オーケー、出発！」

んでもって学校到着！

雄二「みんな、今日が試験召喚戦争当日だ、まず作戦を再確認するっ！」

俺たちの作戦・・・それは数学の長谷川先生を拉致し、数学のフィールドで戦う戦法。そしてみんなが戦っている間、振り分け試験で途中退席した俺と姫路さんは回復試験を受け、途中参戦する寸法だ。

翔平「それじゃあ、みなもの者、配置につけー！」

雄二「開戦だ！」

F組一同「オー！！！」

翔平「じゃっ、姫路さん回復試験がんばりましょう！」

姫路「はいっ！」

ついに開戦・・・配置を説明すると精鋭が正夫、秀吉、美波、ムツリーニ、守備、FFF団 団員、そして代表の雄二と最終防衛の観察処分者 明久。

side 正夫

今回のフィールドは数学。島田さんは得意だっというし、僕もそこそこ得意だ。まず、精鋭が突破口を作って相手の守備をたたかないと！

正夫「紅正夫、行きます！」

美波「島田美波、行きます！」

秀吉「木下秀吉、助太刀する！」

ムツリーニ「土屋康太、同じく！」

美波「試験召喚獣・・・！」

正夫・美波・秀吉・ムツリーニ「」「」「サモン！」「」「」

島田さんの召喚獣は軍服の格好に武器はサーベル。

秀吉のは服装は袴、武器に薙刀の姿の召喚獣。

ムツツリー二召喚獣は忍者を模した姿で、小太刀二刀流のスタイル。

そして僕の召喚獣は、大牙伯父さんの前のキング、つまり大牙伯父さんのお父さんが来ていた服に良く似ていて、武器はザンバットソードのザンバットバットなしバージョンと別世界のキバがファイナルフォームライドした姿のアローの2つだ。僕達の点数は島田さんが89点、ムツツリー二が25点、秀吉が51点。そして僕は68点だ。

正夫「よし！」

僕は軽く近くにいたEクラスの人の召喚獣を僕の召喚獣が攻撃した。しかし、相手も手ごわく、連携で反撃された。

正夫「ぐわっ！」

他のFクラスみんなはムツツリー二並かそれ以下の点数・・・どう考えても勝ち目は無い！

side 翔平

外は騒がしい、もっと点数を稼がないと、しよっぱから負けるかもしれない・・・

教師「二人とも、テストを止めてください！」

翔平「ふう、終わった・・・」

俺がテストを終わらせたのはみんなが追い詰められた時。

教師「結果を発表します。姫路さん、412点・・・松風君5ひゃ・・・」

翔平「結果はいいです、それより早く参戦しないとやばいでしょ。」

外では

美波「このままじゃあ・・・負けちゃう！」

翔平「みんな待たせたな・・・俺、参上！」

俺は皆さんご存知、仮面ライダー電王に出てくる赤色のイマジン、『モモタロス』の決め台詞と決めポーズをまねて（もっともあったこともないし、知っているわけでもないため真似とは言え無いだろうが）、先陣を切った。

翔平「松風翔平・・・いけるぜ！みんな待たせたな！」

雄二「全くだ・・・今はお前が頼りだ！」

翔平「ああ分かった・・・試験召喚獣サモン！」

俺の召喚獣は、改造学ラン（足元まで届き、内側に鳳凰の刺繍）と、武器は肩にかけた2本の日本刀、腰に下げたある2丁のハンドガン、背中に背負っているマシンガン。そして改造学ランの中に収納してあるスタンガンが二つある。

そして気になる得点は・・・

中林「数学・・・538点!？」

Eクラス代表の中林なかばやし ひろみ 宏美も驚いている。

翔平「まっ、これでも低いほうなんだけどね、他の教科も軽く50点以上はいつてるし、大体はこの点数以上だぜ。」

中林「そっ、そんな・・・これは・・・学年主席並、・・・もしくはそれ以上!」

翔平「Eクラス大将(?) 中林宏美の首・・・F組代表(自称) 参謀、松風翔平、首とつたり~~~~!!」

『Eクラス 中林宏美 数学0点』

長谷川「試験召喚戦争・・・Fクラスの勝ち!」

Fクラス一同「やったー!」

しかし、勝利を喜んでいるのをよそに、俺はひとつのいやな予感がした。

西村「戦死者は補習~~~~!!!!!!」

翔平「あっ、ジャイアントロボセンセだ」

西村「・・・お前も補習するか?」

翔平「いえ、遠慮します!」

なるほど、これがいやな予感か・・・戦死者のみんな、ファイトー

雄二「というわけで、なんなくEクラスの設備ゲットだ！」

Fクラス一同「イエーイ！」

明久「いやーすごくつかれたねっ！」

秀吉「明久、おぬしは何もやっとらんだろ。」

こうして俺たちの最初の試験召喚戦争は俺たちの勝利で終わった。

## 第16話・Cと宣戦布告とアウェイケン（前書き）

バカテスト b a k a t e s t

問題：元は百姓の息子で、織田信長の家来になり、後に天下統一を成し遂げたのは誰でしょう。

姫路瑞希・木下秀吉の答え

豊臣秀吉

教師のコメント

正解です。木下さんは最近演劇のほうで豊臣秀吉をやっているのが簡単でしたか。

島田美波の答え

豊臣秀吉

教師のコメント

確かに昔の人物は藤原道長のように苗字の跡に『の』を入れますが違います。とても惜しいです。

吉井明久・土屋康太の答え

木下秀吉

教師のコメント

確かに木下君は演劇で豊臣秀吉の役をしていますし、苗字も旧姓なので惜しいですが、違います。

松風翔平の答え

A・サル

or

B・猿面冠者

or

C・はげ鼠

の内どれ？

教師のコメント

どれも豊臣秀吉のあだ名ですが、ちゃんと名前で呼んであげましょう。



## 第16話・Cと宣戦布告とアウェイクン

前回のあらすじ：

翔平「それじゃあ、みなの方、配置につけー！」

雄二「開戦だ！」

正夫「紅正夫、行きます！」

美波「島田美波、行きます！」

秀吉「木下秀吉、助太刀する！」

ムッツリーニ「土屋康太、同じく！」

美波「試験召喚獣・・・！」

正夫・美波・秀吉・ムッツリーニ「」「」「サモン！」」「」

翔平「みんな待たせたな・・・俺、参上！」

松風翔平「・・・いけるぜ！みんな待たせたな！」

雄二「全くだ・・・今はお前が頼りだ！」

翔平「ああ分かった・・・試験召喚獣サモン！」

中林「数学・・・538点!？」

翔平「まっ、これでも低いほうなんだけど、他の教科も軽く500点以上はいつてるし、大体はこの点数以上だぜ。」

中林「そっ、そんな・・・これは・・・学年主席並、・・・もしくはそれ以上!」

翔平「Eクラス大将(?) 中林宏美の首・・・F組代表(自称) 参謀、松風翔平、首とつたり~~~~!!」

\*\*\*\*\*

side 翔平

Eクラスとの試召戦争は俺たちの勝ちで終わった。ちなみに俺は今どこにいるかというと・・・

翔平「我等Fクラスは、Cクラスに宣戦布告するっ!」

・・・Cクラスで宣戦布告している。

数分後、Fクラスにて

翔平「・・・ボコられてきますた。」

秀吉「そのようには見えぬのじゃがのう・・・」

明久「どこがボコられたんだよ！無傷じゃないか！」

翔平「俺は別に俺がボコられて来たとは言っていないぜ・・・俺の盾にしたやつがボコられたのさ！」

正夫「それもヒドイ！」

雄二「まあ、ちゃんと宣戦布告してきたのか？」

翔平「もちツス！」

雄二「そうか・・・今回の試召戦争では、相手が教科を決めることになっている。」

ムツツリーニ「情報によると、Cクラスのほとんどは現国が得意らしい。」

翔平「へえーよく知っているねっ、」

ムツツリーニ「・・・・・・女子のただけだっど」

雄二「ならムツツリーニの情報を信じて相手が現国の教科を選択するでしょう！そうすると現国が得意なヤツを主力にする必要がある！得意なヤツはいないか！」

姫路「私、少しなら・・・」

翔平「俺は・・・不得意の部類だけど他の奴等よりはマシだろっ」

雄二「そうか・・・なら姫路には試召戦争の日までの間、クラスのみんなに教えてやってくれっ！」

翔平「俺は!？」

雄二「松風、お前には明久や秀吉、紅にムツツリー二といっしょに召喚獣の動かし方を特訓してくれ。これはお前にしかできない！」

翔平「あっーなるほどなっ！」

俺は黒金の腕輪を装着している左腕を軽く上げた。

翔平「おーいみんなー、屋上に集まれよー」

そして屋上へ・・・

翔平「つーわけで・・・アゝウェイクン！」

俺は教科を現国にセットし、召喚フィールドを作成した。教師が作る物より若干小さめだが、文句は言えないか・・・

翔平「まず、みんなの点数を見る、サモン！」

明久・正夫・秀吉・ムツツリー二「」「」「サモン!」「」「」

俺の現国の得点は513点とAクラス並だ・・・当然だな。

俺は明久の召喚獣を見た。得点は・・・24点。

ムツツリー二は明久より多少良く31点。

正夫は58点とそこそこある。

秀吉は67点。

翔平「正夫と秀吉はいい・・・明久、ムツツリーニ！何をどうしたらこんなひどい点になる！」

明久「僕はその・・・仕送りの金を有効的に使うことを考えるのに、頭がいつぱいなんだ！」

翔平「うるせーだまれ！この間始めてお前が隣って知ったけど、前からお前が隣でゲームやったりとか、エ 本読む声が筒抜けなんだよ！」

明久「違うよ！それはエ 本じゃなくて・・・ムツツリーニから買った保健体育の参考書だよっ！」

翔平「ムツツリーニ、お前が明久に売ったその本・・・見せてくれ」

ムツツリーニ「はい・・・」

翔平「・・・ムツツリーニ、この本、俺にも売ってくれ」

ムツツリーニ「了解・・・」

翔平「まっ、まあ明久は一応保健体育の予習していたとして・・・ムツツリーニもこの参考書売るのに時間使っているから仕方ないか・・・んじゃ4人ともっ！召喚獣の訓練、行くぞー！」

明久・正夫・秀吉・ムツツリーニ「オーー！！！！」

試召戦争までの5日、どこまでレベルアップするかにかかっている

な  
・  
・  
・

第17話・バカとライダーと伊又野郎（前書き）

奇跡的な人間「仮面ライダー、リ・ターン！」

翔平「最近勉強ばつかで体が鈍っていたんだ。ストレス解消と行くか！」

奇跡的な人間「やり過ぎないようにね・・・」

## 第17話・バカとライダーとイヌ野郎

前回のあらすじ：

翔平「我等Fクラスは、Cクラスに宣戦布告するっ！」

ムツツリーニ「情報によると、Cクラスのほとんどは現国が得意らしい。」

翔平「へえーよく知っているねっ、」

ムツツリーニ「……………女子のただけけど」

翔平「つーわけで……アゝウェイクン！  
まず、みんなの点数を見る、サモン！」

明久・正夫・秀吉・ムツツリーニ「……サモン！」「……」

翔平「うるせーだまれ！この間始めてお前が隣って知ったけど、前からお前が隣でゲームやってたりとか、エ 本読む声が筒抜けなんだよ！」

明久「違うよ！それはエ 本じゃなくて……ムツツリーニから買った保健体育の参考書だよっ！」



翔平「ムツツリーニ、お前が明久に売ったその本・・・見せてくれ」

ムツツリーニ「はい・・・」

翔平「・・・ムツツリーニ、この本、俺にも売ってくれ」

ムツツリーニ「了解・・・」

翔平「まっ、まあ明久は一応保健体育の予習していたとして・・・ムツツリーニもこの参考書売るのに時間使っているから仕方ないか・・・んじゃ4人ともっ！召喚獣の訓練、行くぞー！」

明久・正夫・秀吉・ムツツリーニ「オー！！！！」

\*\*\*\*\*

side 翔平

Cクラスとの試召戦争まで後1日・・・最初は現国の成績がほとんど1桁だったFクラスの連中も、姫路さんのおかげで20点台ぐらい行っただし、もともと観察処分者で先生の雑用係として使われている明久以外の正夫や秀吉、ムツツリーニも召喚獣の扱いになれてきたっばいし、明久は成績を30点台までに上げた。後の1日でどこまで成績が良くなったとしても、敵は学年で三番目のクラス・・・どうやっても勝てない・・・後初チームワークをあげるのが先決かな。でも、あのくそどもの結束力をどう高めるかが勝敗の鍵だな。

ちなみに俺と正夫、明久、秀吉、ムツツリーニ、雄二、姫路さんに

美波は今、カフェ・マル・ダムールで来ている。店内はおにゃんこクラブの『セーラー服を脱がさないで』が流れている。

木戸「あらっ、正夫君に翔平くんいらっしやい。今日はプライベートで？」

翔平「はいっ、コーヒー飲もうかと・・・」

木戸「後ろの子達は、お友達？」

正夫「はい、」

木戸「そうっ、じゃあその席にでも座って」  
俺たちはカフェ・マル・ダムールのオーナー、木戸明<sup>きとあきひろ</sup>さんの行った席に座った。

姫路「わあー何かレトロですねー」

美波「この飾り皿って・・・」

美波は20数個飾られてある飾り皿を見ながら言った。

木野「それはねー、開店以来、毎年増えている飾り皿なのよ。これを見ていると若かったころを思い出すなー」

美波「へえー」

雄二「みんな、Cクラスとの試験召喚戦争まであと1日、明日だ。まずは作戦の確認をしておく。まず、松風を中心に敵陣をたたき、スキを付いて先生の雑用として使われて召喚獣の使いになれている

明久がCクラス代表である小山<sup>こやま</sup> 友香<sup>ゆうか</sup>をたく作戦だが、これでいいか」

明久「ああ」

秀吉「異議なし」

ムツツリーニ「……………同じく」

美波「ないよ、」

姫路「ありません」

正夫「いいんじゃない」

翔平「問題ないな、少し単純だがいけるだろう」

雄二「そうか」

俺たちはその後それぞれいろいろな飲み物を飲みおえた後、解散した。

翔平「さーて、家帰っても何にもしないし、そこらへんブラブラするか、」

明久「あつ、俺はいいや」

翔平「そつかじゃあな、また明日。」

数分後

暇。ものすごい暇。何にもやること無い。あつ、そういやこの先行  
ったら『Restaurant AGITO』あるな。そこで飯食  
うか。

しかし、その瞬間・・・

翔平（！！）

俺の頭の中にイメージが出てきた、明久だ。明久の背後にはファン  
ガイアがいた。

翔平「明久が危ない！」

俺はイクサリオンEEに乗り、家の方向にバイクを走らせた。

side 明久

家帰ったらまずカップめん食って・・・それから何しようかな

ドシッ、ドシッ

変な足音が聞こえる。なんだろう？僕は振り返った、そこにいたの  
は・・・

ドッグファンガイア「ライフ・・・エナジー！」

・・・ファンガイアだ

side 翔平

明久が見えてきた。・・・そうしてもう一人。イヌっぽいファンガ  
イアだ。

襲われている！助けないと！この、修復間もないイクサV2で！

イクサナツクルV2「レ・デ・イ」

翔平「变身！」

イクサナツクルV2（イクサベルトV2）「フィ・ス・ト・オ・ン」

キーン！ヒューン・・・ピロロ・・・キュイッピルッジャキインー！！

イクサV2 B-M「はああー！！！」

ドッグファンガイア「ぐわっ！」

明久「へっ！？」

イクサV-2「よしっ」

俺はイクサカリバー・カリバーモードを取り出し、ファンガイアを斬った。

イクサV-2「とどめはこの新しいフェッスルでっ！」

俺はメンテナンスと共に新開発されたフェッスル、ブレイクフェッスルを取り出した。

イクサベルトV2「イ・ク・サ・ブ・レ・イ・ク・ラ・イ・ズ・ア・ツ・プ」

イクサブレイク・・・それはイクサにとってもっとも足りなかった格闘戦での必殺技・・・右足に高電圧をあつめ、とび蹴りで敵に攻

撃させる技。

イクサV2「そりゃ！」

ドッグファンガイア「ぐわあああ！！！！」  
ドッグファンガイアは、全身がステンドグラス状になり、粉々になった。

一件落着か・・・

明久「あつ、あの・・・」

あつやべつ見られた？

明久「あなたは誰ですか？」  
あつ、変身するところ見られてないんだ。こういう場合、こう言った方がいいのか・・・な？

イクサ「仮面・・・ライダー・・・仮面ライダーだ」  
俺はイクサリオニーに乗りその場を去った。

明久「仮面・・・ライダー・・・」

## 第18話・現国とFFF団とAクラス（前書き）

バカテスト b a k a t e s t

問題：以下の意味を持つことわざを答えなさい

- （1）得意な事でも失敗してしまう事
- （2）悪い事があつたうえに、更に悪い事が起きる喩え

姫路瑞希の答え

- （1）弘法も筆の誤り
- （2）泣きつ面に蜂

教師のコメント

正解です。他にも（1）なら『河童の川流れ』、『猿も木から落ちる』、（2）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

- （1）弘法の川流れ

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

- （2）泣きつ面蹴ったり

教師のコメント

君は鬼ですか。

紅正夫の答え

(1) バイオリンの糸がすぐ切れる

教師のコメント

それは個人的なことではないでしょうか？

松風翔平の答え

(1) オデノカラダバボドボドダ！

(2) 戦死者は補習だー！！！！

教師のコメント

オンライン語で答えないでください。

西村教論のコメント

補習するか？

松風翔平のコメント

いいえ、間に合っています。



## 第18話・現国とFFF団とAクラス

前回のあらすじ：

雄二「みんな、Cクラスとの試験召喚戦争まであと1日、明日だ。まずは作戦の確認をしておく。まず、松風を中心に敵陣をたたき、スキを付いて先生の雑用として使われて召喚獣の使いになれている明久がCクラス代表である小山<sup>こやま</sup> 友香<sup>ゆうか</sup>をたたく作戦だが、これでいいか」

明久「ああ」

秀吉「異議なし」

ムツツリーニ「……………同じく」

美波「ないよ、」

姫路「ありません」

正夫「いいんじゃない」

翔平「問題ないな、少し単純だがいけるだろう」

イクサベルトV2「イ・ク・サ・ブ・レ・イ・ク・ラ・イ・ズ・ア・ツ・プ」

イクサV2「そりゃ！」

ドッグフアンガイア「ぐわああああ！！！！」

明久「あつ、あの・・・  
あなたは誰ですか？」

イクサ「仮面・・・ライダー・・・仮面ライダーだ」

明久「仮面・・・ライダー・・・」

\*\*\*\*\*

side 翔平

ガラガラガラガラ ドアを開ける音

翔平「おっはー、」

明久「ホントなんだって、見たんだよっ！」

翔平「どーしたー」

明久「昨日見たんだよっ、仮面ライダー！なのに誰も信じてくれな  
いんだよ！」

翔平「そっか、多分みんな今日の試召戦争に頭がいっぱいなんだよ  
っ、」

さっそく言ってるぜ、仮面ライダーの事・・・あん時正体あかした  
ほうが良かったかな？でもヒーローは正体明かさないからな

そして時は試験召喚戦争、開幕の時間へ

翔平「みんなつ、しまつていくぞー！ー！！！」

Fクラス「オオー！ー！！！」

フィールド発生・・・、教科は・・・

現代国語！

翔平「よしつ、ムツツリーニの読みとおりだつ！みんなつ、復習（一部召喚獣訓練）の成果を見せてやれつ！」

特攻隊は、ムツツリーニのデータによる、現代国語が得意なヤツを次々と道ずれにした。これだけ道が開けば進入できるだろう。

翔平「松風翔平！・・・敵陣地に武力介入するっ！」

正夫「紅正夫、翔平を援護するっ！」

明久「吉井明久！観察処分者の力、敵に見せ付けてくる！」

姫路「姫路瑞希、Cクラス代表・小山友香こやまゆづかの首、とります！」

秀吉「木下秀吉、戦争混雑に助太刀いたすっ！」

ムツツリーニ「土屋康太・・・目標を斬る、」

翔平・正夫・明久・姫路・秀吉・ムッツリーニ「「「「「サモン  
！」「」「」「」

みんなそれぞれの召喚獣をサモンした。中でも姫路さんの召喚獣は  
始めてみた。西洋風の鎧に巨大剣のスタイルだ。

翔平「さーて、行きますか！」

俺の一声で召喚獣たちはCクラス内部へ突入した。

『Cクラス生徒 現代国語157点 VS Fクラス松風翔平 現  
代国語534点』

翔平「そりゃ！」

『Cクラス生徒 現代国語0点』

翔平「しゃっ！」

俺はガッツポーズをとりながら言った。・・・どこぞの世界にもい  
たバカのように。

しかし、状況は不利だ。俺たち精鋭と雄二以外のみんなはCクラス  
とまともに戦えもしない奴等ばかりだ。こいつ等、『リア充』たち  
相手だものすごい強いのに！・・・待てよ、リア充？ そうだ！ リ  
ア充を餌にこいつ等を動かせばいいんだ！

翔平「ムッツリーニ！ Cクラスの中で最もリア充な奴、知っている  
か！？」

ムツツリーニ「・・・知ってる。x野 尾という奴がBクラスの女子と・・・」

翔平「Fクラス諸君、聞いてくれ！」

Fクラス「何だ？」

翔平「Cクラスのx野 尾は、Bクラスの女子と付き合ってる、俺たちの敵、『リア充』なんだ！」

Fクラス「何だって！」

翔平「みんなはこれを許していいと思うか！」

Fクラス「許すもんかー！」

翔平「そうだ！奴等リア充を許してはならない！なら、われ等どうする？妬むか？呪うか？・・・しかし！そんなことはただの子供の嫌がらせにしか過ぎない！」

Fクラス「！」

翔平「われ等は勉強ができれば、もてもしない！なら、われ等の使命はリア充を1人残らず！・・・倒すだけだ！・・・俺はここに対リア充異端審問会『FFF団』を結成するっ！」

Fクラス「オー！」

俺が今作り出したFFF団の団員は全員黒覆面と黒マントを着用し

た。

明久「へえーカッコいいな・・・」

秀吉「それより松風よ、なぜお主の召喚獣の服装と武器が変わっているのじゃ？」

秀吉の言葉で気がついた。俺の召喚獣の格好は、『コードギアス 反逆のルルーシュ』にでてきたゼロの着ていた服装に似たものを着ており、武器もレイピアひとつに変わっていた。これはもしかしたら・・・対リア充用の武装なのか？

翔平「・・・そんなのはどうでもいい、それよりあいつ（Cクラス代表・小山友香）の首とるぞ、」

『Cクラス 小山友香 現代国語 319点 VS Fクラス 松風翔平 現代国語 485点』

翔平「小山Uか覚悟ー」 棒読み

小山「字い間違っている!」

『Fクラス 小山友香 現代国語 0点』

・・・またしても俺たちの勝ちか

一方、x野 尾はと言うと・・・・・・・・・・

x野 尾「ぎゃあああああ!.....!」

FFF団員「死ね、リア充！マジで死ね！死ね！死ね！死ね！そして死ね！」

×野 尾「ぎゃあああああ！！！！！」

『Cクラス×野 尾 現代国語0点』

FFF団員「やったー！！！！リア充は消えた！我々の勝利だ！」  
ま、まあ勝ちであることに変わりはないか・・・

翔平「みんなちゅうもーくっ！」

翔平「われ等はリア充を嫌う異端審問会、『FFF団』だ！現実生活が充実しているものよ！われ等を恐れよ！現実生活が充実していないものよ！われ等を求めよ！許されてはならない現実生活が充実しているリア充達は、われ等が裁く！」

そして俺たちはCクラスと設備の交換をした。しかし、それもつかの間・・・思いもよらぬ展開が・・・

ガラガラガラガラ ドアを開ける音

そこには秀吉の姉でAクラスの実力者、木下優子きのしたゆうこがいた。

優子「私達Aクラスは、Fクラスに宣戦布告しますっ！」

## 第19話 - 閃光のF/獣の切り札

前回のあらすじ：

翔平「松風翔平！・・・敵陣地に武力介入するっ！」

正夫「紅正夫、翔平を援護するっ！」

明久「吉井明久！観察処分者の力、敵に見せ付けてくる！」

姫路「姫路瑞希、Cクラス代表・小山友香こやまゆうかの首、とります！」

秀吉「木下秀吉、戦争混雑に助太刀いたすっ！」

ムツツリーニ「土屋康太・・・目標を斬る、」

翔平・正夫・明久・姫路・秀吉・ムツツリーニ「「「「「サモン  
！」「」「」「」

翔平「そうだ！奴等リア充を許してはならない！なら、われ等どうする？妬むか？呪うか？・・・しかし！そんなことはただの子供の嫌がらせにしか過ぎない！われ等は勉強ができれば、もてもしない！なら、われ等の使命はリア充を1人残らず！・・・倒すだけだ！・・・俺はここに対リア充異端審問会『FFF団』を結成するっ！」



翔平「われ等はリア充を嫌う異端審問会、『FFF団』だ！現実生活が充実しているものよ！われ等を恐れよ！現実生活が充実していないものよ！われ等を求めよ！許されてはならない現実生活が充実しているリア充達は、われ等が裁く！」

\*\*\*\*\*

side 翔平

昨日、秀吉の姉でAクラスの実力者、木下優子が宣戦布告してきた。決戦は、後2日。普通の試召戦争とは違って、一騎打ちの戦いだ。

一騎打ち・・・それは一対一で戦う事、つまり一回の戦いで全てが決まる。

なぜ一騎打ちになったかというと、集団戦ではAクラスでは勝てないからだ。タイマンなら、俺や姫路さん・・・後たまーにやる気を出せばスゲー賢いフィリップに勝機はある。勝負は8回まである。

俺は鳴海探偵事務所に来た。昨日、フィリップが学校に来なかったから様子に来たからだ。

コンコン ドアをノックする音

あれっ、ドアが開いてる・・・

ガチャ・・・ ドアを開ける音

翔平「おじゃまします・・・」

誰もいない・・・どういうことだ？俺は秘密基地みたいな部屋に入った。そこには一人、フィリップがいた。

フィリップ「松風・・・翔平・・・」

翔平「翔太郎さんたちはどうした？」

フィリップ「翔太郎や亜樹ちゃんは・・・ドーパントに捕まってる・・・」

翔平「はっ？助けにいかねーの？仮面ライダーだろ？お前、変身できないの？」

フィリップ「しようと思えば・・・できる。でも、したくないんだ。」

翔平「なんで？」

フィリップ「説明しよう・・・僕と翔太郎が変身する仮面ライダーWは、翔太郎の体で変身し、僕の精神が翔太郎に移るんだ。それにメモリを入れる必要がある。でも、相手のドーパントの仕業でメモリを入れるスロットが塞がれてるんだ・・・だから変身できない。」

翔平「フィリップ・・・お前、俺の質問に答えてないぞ・・・」

フィリップ「・・・」

翔平「お前は『したくない』って言ったよな、それはつまり、お前の体でライダーに変身できるんだろ？どうして、それだけのことが

したくないんだ？」

フィリップ「・・・実は僕が変身するためには、翔太郎の体で変身する時のメモリとはちがうメモリを使わなければならないんだ。」

翔平「いったいどんなメモリだ？」

フィリップ「君の持つメモリは・・・生きてはいないよね？」

翔平「当たり前だ・・・」

フィリップ「でも、僕の体で変身するのに必要なメモリは自らの意思で行動しているため、居場所だ特定できないんだ・・・」

生きたメモリ・・・でもこれがどうして変身を避ける理由につながるんだ？

フィリップ「僕がそのメモリを使って変身すると、僕の意味とは関係なく、暴走するんだ・・・」

翔平「なるほど、<sup>バーサーカー</sup>猛戦士というわけか。だけど、そんなのただの言い訳にしか過ぎないぜ。」

フィリップ「!？」

翔平「お前、翔太郎さんたちを助けたいって思わないのか!？」

フィリップ「そりゃ・・・助けたいさ」

翔平「なら行け、もしお前が暴走したら、俺がお前を止める、それ

ならいいだろ。」

フィリップ「しかし……」

翔平「俺は明日そこ行くぜ、お前が来ることを信じているからな・  
」

フィリップ「ちょっと!」

俺は去っていった。

sideフィリップ

翔太郎や亜樹ちゃんを助ける……君に言われなくてもそうしたい  
さ、でも……(!!)

ファングメモリ「ギャアアオツ!」

フィリップ「ファング!まさか、君が来るなんて……」

でも、今はこうするしかない……たとえ暴走しても、翔太郎や亜  
樹ちゃんを……僕の大事な人たちを……!

次の日

side翔平

ここか、翔太郎さんや亜樹子さんは……いた!後変なドーパント  
も!

アームズドーパント「さーて、お前達のお仲間が来るか……なあ  
!」

翔平「呼ばれて、飛び出て、ジャジャジャーン」

アームズドールパント「なんだお前!？」

翔平「噂の仮面ライダーでーっす!」

アームズ「フン、まあいい・・・こいつ等を殺すか」

アームズは剣を構えて、翔太郎さんを切ろうとしたそのとき・・・

ファングメモリ「ギャオーギャオーッ!」

ファングが剣を噛んでとめていた。

翔平「へえ、あれが生きたメモリねえ・・・」

ファングはアームズから後退した。そこにいたのは・・・

イリップ!

フ

翔太郎「まてっ!フィリップ!それは・・・!」

フィリップ「翔太郎、さいごまで悪魔と相乗りする勇氣、あるかな!？」

ファングメモリ「F a n g !」

翔太郎「やめろ!フィリップ・・・」

翔太郎さんの意識とともにダブルドライバーにささったままのジョーカーメモリがフィリップのダブルドライバーに移動された。

フィリップ「変・・・身!」

ダブルドライバー「Fang-Joker!」

「アエエエエン…!!」(シュゴオオオ!!)」「(ファング変身音&発光)

「(ジャギーーン)バンバンバン!!」(ジョーカー変身音&発光)

フィリップの体はたちまち仮面ライダーW ファングジョーカーに・

W-F「うわあああああ!!!!!!!!」

ファングメモリ「Arm-Fang!」

Wファングジョーカーの右腕にファング(牙)のようなものが装着された。

アームズ「ぐわあああああ!!!!」

そして・・・

ファングメモリ「Shoulder-Fang!」

アームズ「ぐわあああああ!!!!」

ファングメモリ「Arm-Fang!」

Wは俺に攻撃しようとした。

翔平「ライ。」

一方Wの中ではこんなことが・・・

フィリップ「信じていたよ。僕を見つけてくれるって。」

翔太郎「ああフィリップ、行けぞ。」

\*\*\*\*\*

W・FJ「命拾いしたね、あと少し遅れたら、確実に死んでたよっ」

翔平「自我が戻ったか、」

W・FJ「ああ、それより」「ああ」

Wはアームズドールパントのほうを向き・・・

W・FJ「さあ、お前の罪を数えろ！」

ファングメモリ「Maximum・Fang！」

W・FJ「ファングの必殺技だからえーと、・・・ファングストライザーなんてどうだ？」「君に任せるよっ」「ファングストライザー！」

アームズドールパントのメモリは壊れた。これにて一件落着だな。あつ、俺今回全く目立ってないぞ。

Aクラスとの試召戦争まで・・・あと1日。





## 第20話・午前と一騎打ちと成績（前書き）

バカテスト b a k a t e s t

問題：「初めは勢いがよいが、終わりは振るわないこと」という意味の四字熟語を答えよ。

姫路瑞希の答え

竜頭蛇尾

教師のコメント

正解です。竜の頭は迫力がありますが、後ろにいくごとに蛇のようにひよろひよろとなっていくということです。

土屋康太の答え

セッ  
ス

教師のコメント

あなたの珍回答に先生はいつもひやひやです。

吉井明久の答え

人生

教師のコメント

あなたはなにを言っているのですか？

松風翔平の答え

影山瞬

教師のコメント  
その人に失礼です。

## 第20話・午前と一騎打ちと成績

前回のあらすじ：

フィリップ「説明しよう・・・僕と翔太郎が変身する仮面ライダーWは、翔太郎の体で変身し、僕の精神が翔太郎に移るんだ。それにはメモリを入れる必要がある。でも、相手のドーパントの仕業でメモリを入れるスロットが塞がれてるんだ・・・だから変身できない。」

翔平「フィリップ・・・お前、俺の質問に答えてないぞ・・・」

フィリップ「・・・」

翔平「お前は『したくない』って言ったよな、それはつまり、お前の体でライダーに変身できるんだろ？どうして、それだけのことがしたくないんだ？」

フィリップ「・・・実は僕が変身するためには、翔太郎の体で変身する時のメモリとはちがうメモリを使わなければならないんだ。」

フィリップ「変・・・身！」

ダブルドライバー「Fang-Joker！」

「アエエエエン・・・！！（シュゴオオオ！！）」（ファング変身音&発光）

「（ジャギーン）バンバンバン！！」（ジョーカー変身音&発光）

W・FJ「さあ、お前の罪を数えろ！」

ファンゲメモリ「Maximum・Fang！」

W・FJ「ファンゲの必殺技だからえーと、・・・ファンゲストライザーなんてどうだ？」「君に任せるよっ」「ファンゲストライザー！」

\*\*\*\*\*

side 翔平

「私達Aクラスは、Fクラスに宣戦布告しますっ！」

秀吉の姉、木下優子がFクラスに入ってきてこの言葉を言うてから3日たつか。今日が試召戦争当日。もともと、圧倒的な戦力差あつてかこつちにも多少の勝機がある一騎打ちだが。

雄二「今日がAクラスとの試召戦争当日だ。今回の戦争は通常のものとは違い、選抜メンバーで戦う『一騎打ち』だ。メンバーは、・・・」

一騎打ちのメンバーは俺と正夫と明久とムツリーニと姫路さんと雄二と美波、そしてフィリップの8人だ。俺や姫路さんにフィリップは本当ならAクラスの実力を持っているから絶対はずせないだろう。ムツリーニは（性的な意味での）保健体育では教師並の得点を持っているし、・・・あとはまあ他の奴等よりはマシって事だけ

かな。明久は観察処分者で召喚獣の使い方は慣れてるし、雄二はまあ、代表だから出なきゃいけない・・・だけ？美波は数学はBクラス並だし、・・・正夫はまあ総合的にいいのか。

みんなに分かりやすく説明するために、Fクラス選抜の点数のデータを見てもらう。

俺 - 現代国語	759点
数学	820点
物理	737点
科学	714点
古典	746点
英語	1058点 (得意科目)
保健体育	762点
現代社会	771点
世界史	703点
日本史	562点 (苦手科目)
総合	7602点
平均	760.2点

正夫 - 現代国語	86点
数学	72点
物理	61点
科学	83点
古典	43点
(苦手科目)	

ムツリーニ-		
現代国語	数学	物理
38点	31点	15点

総合	平均
410点	41点

英語	保健体育	現代社会	世界史	日本史
64点	49点	43点	25点	
英語	古典	科学	物理	数学
31点	64点	52点	24点	31点
明久-現代国語				

英語	保健体育	現代社会	世界史	日本史	総合	平均
69点	94点	193点（得意科目）	57点	67点	825点	82.5点

物理	数学	美波 - 現代国語
37点	213点	16点

平均	総合
440.9点	4409点

日本史	世界史	現代社会	保健体育	英語	古典	科学	物理	数学	姫路 - 現代社会
453点	428点	412点	430点	425点	452点	439点	393点	515点	462点

平均	総合	日本史	世界史	現代社会	保健体育	英語	古典	科学
80.3点	803点	21点	29点	23点	576点	29点	24点	17点

フィリップ 本気を出したことがないため不明。

		雄二-現代国語									
総合	平均	日本史	世界史	現代社会	保健体育	英語	古典	科学	物理	数学	現代国語
550点	55点	64点	51点	53点	67点	30点	56点	48点	60点	59点	62点

総合	平均	日本史	世界史	現代社会	保健体育	英語	古典	科学	物理	数学	現代国語
464点	46.4点	14点	37点	23点	28点	58点	9点	29点			



現在、午前10時。試験召喚戦争・一騎打ちが始まるのは午後。負ければせっかくCクラスから試召戦争で奪い去って手にいれた今の設備も無くなる。

雄二「なあ松風、」

翔平「なんだ、雄二？」

雄二「Aクラスと戦った後のことなんだが・・・」

翔平「・・・そうか。確かに万が一勝っても、次は普通の試召戦争しかできないしな・・・」

雄二「つーわけだ。他の奴等に言っても納得できねーだろうから今は俺とだけでだ。」

翔平「ああ分かっている。がんばろう。」

## 風都高校新聞・特別号

風都高校新聞・特別号

Aクラス対Fクラス戦、本日午後に関戦！

最近、試験召喚戦争を行い、次々と勝利している2年Fクラスが何と、Aクラスに宣戦布告をしたという情報を新聞部が捉えた。

最初はワンランク上位のEクラスを倒し、次はCクラスと戦い、勝利した。

ちなみにその際、リア充を憎む『非リア（充）』の味方、異端審問会、『FFF団』が誕生した。ちなみに、『FFF団』の会員は募集中なので、入会したい方は、会長の須川<sup>すがわりよう</sup>亮くんに入会の許しをもらいましょう。

まさかの最下位クラスが次々と上位クラスを倒すという快挙に学園中が話題になった。

その勝利の秘訣を探るべく、我々は調査を行った。

調査の結果、Fクラスには代表の坂本雄二を始めに、学年次席にもっとも近い姫路瑞希、そして数学においてはBクラス並の島田美波、やる気を出せばAクラス並の頭脳を持つ左将暉、保健体育において右に出るものはいない土屋康太、そして学力は関係ないが、この学校きつての稀代の美少女・木下秀吉（本人曰く、ワシは男じゃ）2学年きつてのバカの代名詞と言われる『観察処分者』の称号を持つ、吉井明久、そして、『観察処分者』を越える称号『黒の完全処分者』の松風翔平。

Fクラスには少なくとも3人はAクラスのトップの成績を持っている。いったい誰が勝つのか？火蓋が切って落とされる。

第21話・Episode of SHOUHEI (前書き)

今回は翔平の過去についての話なのです。

## 第21話・Episode of SHOUHEI

side 翔平

一昨日の夜、俺は夢を見ていた。もしかしたら、Aクラスに昔懐かしいヤツがいるからだ。……霧島翔子<sup>きりしましょうこ</sup>が。

俺と霧島が始めてあったのは小学4年の時、俺はこの町、風都に引っ越してきた。

翔平『ここが今日から通う小学校が、……職員室どこだろ。転入手続きしないと。』

俺はその日、学校に来たが、職員室が分からず困っていた。俺はとりあえず近くにいた女子生徒の話しかけた。……霧島だ。

翔平『あの〜』

霧島『なに?』

俺はしばらく見とれていた。……黒い長髪で日本人形みたいで、とても可愛いかったからだ。

霧島『……用事は?』

翔平『あ、職員室ってどこ? 転校してきたばかりでよく分からなくて……』

霧島『……その角を曲がった所』

翔平『あつ、ありがとう』

そして数分後、職員室へ行き先生と共に教室へ行った。

さてと・・・自己紹介だ。

翔平『松風翔平です。趣味は（・・・）喧嘩やらまあ、色々です。ヨロシク。』

担任『・・・そ、それでは松風くんの席は霧島さんの隣の席で、その席に着席してください』

翔平『ふぁーいつ、（・・・！）』

俺の隣になる人は、朝あつたあの娘だ。

翔平『ああ、霧島さん・・・だっけ。ヨロシク！』

俺は右手でサムズアップを決めた。

霧島『・・・よろしく。』

そして時は下校時間。俺はひとりで家に帰っていた。

翔平『ふぁあゝ・・・眠い・・・あつ』

俺はあくびをしながら家に向かっていた。その途中、霧島が信号が赤になっていることに気付かず、横断歩道を渡っているのが眼に入った。

翔平『霧島！』

霧島『えっ？・・・！』

俺の呼び声で霧島がやっと現状を理解した。そしてそのときちょうどトラックが霧島のところに走っていた。

翔平『危ないっ！』

俺は全力で走った。・・・ランドセルは邪魔なのでおろしてから。

ギリギリ・・・助かった。

ドガッ

翔平『痛つつつつつ・・・』

俺は電柱に頭をぶつけた。

翔平『だっ、大丈夫？』

霧島『うつ、うん。あの・・・』

翔平『あれっ？ランドセルどこだ？』

俺はあたりをキョロキョロ見渡した。ランドセルが合ったのは・・・  
・・・横断歩道の真ん中・・・

翔平『やべー！！俺の・・・俺のランドセルー！！』

これが俺と霧島の出会い。

そしてこの一件からなのか、俺と霧島は徐々に仲良くなっていった。

そして4年での遠足では・・・

担任『では、お昼ご飯を食べてください』

クラス全員おそらく『いただきます！』

4年のころ、遠足で風都タワーの近くにある公園に来ていた。

翔平『ふう・・・』

俺は一人でオムライスを食べていた。

霧島『・・・ねえ、何でいつもオムライス食べているの？』

俺の通う学校は給食がでない、だから弁当を持っていったかないといけない。俺の弁当の中身の大半は、オムライスだ。

翔平『好きだからって言う理由以外に何かあるか？俺はこう見えても』（自分で作った）素晴しきオムライスの会』の会長だからなっ』

霧島『・・・ねえ、お昼1人なの？』

翔平『別にいいだろ。それに俺は1人の方が好きなんだ』

あの時はそういったけど、あれは嘘だ。当時の俺は、友達を作るのが苦手だった。

霧島『・・・なら一緒に食べよ』

そう言いながら、霧島は俺の近くに座ると、俺にある事を言った。

霧島『・・・翔平は1人じゃないよ。1人だと思っけていても、他の

人は翔平の事を思っているから・・・」

そして5年生のころ、事件が起きた・・・

翔平『ぐわっ！』

生徒A『どうだ、痛いか？痛いかよー！』

生徒B『いつも遊んでいるくせによっ、テストでいい点取りやがって！』

生徒C『お前なんか死んじまえばいいんだ！』

理不尽な理由でいじめを受けていた、5年生のころ。

生徒C『オラア！ギブか？コラア！！なんか言えよ！』

生徒A『泣きたきや泣けよ！アン！泣けよ、泣けよ！』

・・・カス共が・・・俺は内心そう思っていた。もし俺がここで手を出したら間違いなく退学だろう。こんなカス共のために退学になる気はさらさら無かった。

ガラッ ドアが開いた音

教室でいじめられているのか、教室に入ってきたやつがいた・・・

霧島・・・

霧島『・・・なにを・・・しているの・・・？』



生徒B「あ？見てわかんないかよ！？こいつがム力つくから殴って  
いるだけだよ！」

[illegible]

・ ・ ・ もういいんだ霧島。俺にかかわるな。お前にまで危害が加わる。

霧島  
・  
・  
・  
間違って  
いる

生徒A 「アン？なんていったよ？オラア！なんか言ったか！アン！？」

霧島「そんな理由で翔平をいじめるのは……間違っている」

生徒C 「はっ？コイツの肩を持つ気か？！霧島お嬢様よ！！えっ！？」

生徒B「コイツのせいで俺のテストが一番じゃなくなっただぜ！  
？こいつが居るから！！お前だってそうだろ！？」

霧島「それでも……翔平をいじめる理由にはならない……」

霧島  
・  
・  
・

生徒B「立つたらさう……お前も死ねよつ！」

奴等は生徒 A に俺を拘束させて、2 人は霧島をいじめだした。

生徒A 「へっ、いい眺めだな！」

霧島「キャツ！痛い！止めて！」

生徒C『やーだね！ひゃ　ははははは！！！！』

翔平『・・・よくも・・・』

生徒A『アン？』

翔平『よくも俺だけじゃなくて！霧島をいじめたな！！！！』  
俺は生徒Aに蹴りをかました。

生徒A『ぎゃあああ！！！！』

くるっ　俺が生徒Cの方向に振り向く音

生徒C『ひっ！』

翔平『よくも！』

俺は生徒Cにラリアットを決めた。

生徒B『おいおい、そんなことしたら退学だよ！？』

翔平『知るか、先にやってきたのはお前達のほうだぜ。・・・俺だけにしたら、まだ我慢はできた。・・・なのに！どこに霧島をいじめる理由がある！あいつがお前に何かしたか！？』

生徒B『・・・』

翔平『黙っていちやあ分からないだよ！・・・10秒だ・・・10秒以内に理由を述べよ。これくらいならできるだろう　10・・・9・・・8・・・7・・・6・・・5・・・どうした？時間がどんどん

無くなつていくぞ!？」

生徒B『えっ・・・えっ・・・と』

翔平『・・・4・・・3・・・2』

生徒B『アイツが!・・・お前の肩を・・・持つから・・・』

翔平『・・・2・・・1・・・0・・・。時間切れだ。俺の  
判決を言い渡そう・・・死だ!!!』

生徒B『まつ待てよっ!』

翔平『先に『死ね』といつてきたのはお前だ・・・違うか?・・・  
まあいい、少し重すぎだな。軽くしてやろう・・・』  
俺はハイキックから、ボディースラムを決めた。

翔平『はあ・・・はあ・・・はあ・・・霧島、大丈夫か?』  
俺は霧島に手を伸ばした。しかし・・・

パチンツ!

翔平『!』

霧島『・・・こわいよ』

恐怖により、俺は手をはたかれた。

\*\*\*\*\*

目が覚めた。Aクラスとの戦争まであと1日・・・

今日はドーパントに捕まった翔太郎さんたちを助けないと・・・！

## 第22話・Episode of SHOUHEI ?

side 翔平

昨日の夜も、俺は夢を見た。・・・一昨日の夢の続きだ・・・

翔平『よくも俺だけじゃなくて！霧島をいじめたな！！！』

翔平『はあ・・・はあ・・・はあ・・・霧島、大丈夫か？』  
俺は霧島に手を伸ばした。しかし・・・

パチンッ！

翔平『！』

霧島『・・・こわいよ』

恐怖により、俺は手をはたかれた。

\*\*\*\*\*

この一件で、俺は退学になった。・・・そして俺は新しい学校でも溶け込めずにいた。そして、俺は中学1年へ・・・近所の国立の中学校、『風都国立大学付属中学校』の中学1年生として、入学した・・・そしてなんの運命なのか、霧島も・・・この中学校に入学していた・・・

2年の春、俺は理科の授業が大嫌いだった。理科そのものが嫌いだったわけではなく、教師が嫌いだった。そのときの教師は、後に俺への復讐の為にビーメモリを使って、ビードーパントに変身した『港文也』だ。

ある日、俺はその教師にセクハラをしているのを見た。最初は別に気に留めずにほうつておいた。・・・変に関わると、面倒なことになると思ったからだ。ある日俺は、その理科教師が霧島にセクハラをしているのを見た。

俺が図書館でレポートのための資料を集めて教室に戻ろうとしていたときだ。教室に戻るには、理科の教室を通り過ぎる必要があった。そのとき俺は理科室から声がしてくるのが聞こえた。男と女の声・男のほうはすぐに港文也だと気付いた・女の方のほうの声は、なつかしい声だった。最初は誰だか分からなかったが、会話を聞いているうちに霧島だと分かった。

港文也『なあなあ霧島君！？いいだろ！？ねえ！！』

霧島『止めてください！』

霧島が教室から出てきた。いつもは落ち着いていた霧島が、あんなに嫌がるのは初めてだ。いつもちゃんと着ている制服も、わずかだが乱れていた。多分あいつに脱がされそうになったのだろう。

霧島『・・・！』

俺と霧島の目が合った。霧島はすぐに駆け足で教室のほうに向かっ

た。

港文也『・・・チツ!』

アイツは教室の中で舌打ちをしている。・・・今すぐにも殴りたい、そう思っていた。でも、そんなことすれば退学になるのは明白だ。暑くなりすぎてはダメ・・・俺は考え抜いた末、犯罪ではあるがハッキングをすることに決めた。

ポキポキ・・・ 指を鳴らす音

翔平『アイツのコンピューターの中は・・・』

カタカタカタカタカタカタカタ・・・

翔平『アイツのコンピューターに接続・・・!これは!』

俺はひとつの動画をアイツのパソコンからダウンロードした。そこには・・・

翔平『へっ、これは使える!これを校長のパソコンに転送すれば・・・!』

次の日・・・学校の掲示板にはこのようなことが載っていた。

『港教諭、教育職員免許 廃止』

たくさんの人たちが見ている。その中には霧島もいた。

秀吉『ほう、何事じゃろうな』

明久『港先生クビだってさ。いやゝ良かった、俺あの人好きじゃな

かったから。』

俺は明久や秀吉と仲が良かったので、よくいつしよに行動していた。

秀吉『しかし何でまたいきなり・・・松風はどう思う？』

翔平『なんかしでかしたんじゃないの？』

俺は霧島を見ながら行った。・・・アイツ大丈夫かな・・・そう思っている、隣にいたヤツがへんなこと言った。

隣人『なあしっているか？港先生がクビなつたわけ？あの人プライベートでS Mプレイやっていてさあ、それが先生にばれたんだってさ！』

コイツの言っていることは本当だ・・・港文也のパソコンに保存されていた動画には、港文也がS Mプレイを受けている映像が、たっぷり1時間あったからだ。・・・まあ、俺は気持ち悪くなって、最初の5分しか見てないけど・・・

秀吉『じゃが誰がやったのじゃろうな？』

翔平『さあな・・・たぶんこの学校内にいるって言うことは確かじゃないか？』

そしてその一年後の冬・・・俺たち3年生はスキー合宿に来ていた。

明久『へえ〜翔平けっこう上手いじゃん』

翔平『まあな、小学4年のとき、学校でスキー合宿に行つてで滑つ



たことあるから。』

明久『へえーじゃあ俺にも教えてよ!』

秀吉『ワシにもっ!』

翔平『ああいいぜ』

午後6時・・・全員集合の時間だ。しかも学年全員集まったかチエツクしないといけないから、遅れてきたやつで部屋で休む時間は遅くなる。

10分経過。いつまでたつても部屋で休めない。ったくいったいどんなバカが遅れているんだ?そのとき、教師の声が聞こえてきた。

教師(Ｃ組の霧島さんはまだ来ないんですか?)

教師(ええ・・・、まずはみんなを部屋に帰すべきかと・・・)

・・・霧島が遅れている?そんなはずは無い。あいつはいつも真面目で、送れることなんて絶対にありえない。・・・いったいどうして?

教師『えーでは、皆さん部屋に戻ってください。』

生徒一同『はい』

俺はみんなが移動するどさくさにまぎれて、外にでた。・・・どこかに霧島がいるはずだ。俺は外においてあったスノーボードをとって霧島を探し始めた。

翔平『おーい霧島！どこだ！』

ふぶきも降ってきて、視界はさらに悪くなった。・・・もうだめか  
そう思ったとき、霧島の声がかすかに聞こえた。

霧島『たす・・・けて・・・』

翔平『霧島！』

霧島は雪に埋まって動けない状態だった。俺は必死の思いで霧島を  
助けた。

翔平『ダメだ・・・この吹雪じゃ帰れない！』

もうダメか・・・そう思ってたとき、何故かちょうどいい大きさの  
洞穴を見つけた。とりあえずそこに入ってみることにした。入ると  
すぐに木の枝があつたので、俺は持ってきたライター（本当は持つ  
てきてはダメだが）で火をつけた。

翔平『なるほど・・・今日はここで就寝か・・・』

俺はそう言いながら二重にできていたフリースのひとつを霧島に  
着せた。

翔平『冷えるだろうから、これも着ておけ』

霧島『・・・ありがとう』

俺はバックの中に入れておいたお菓子を出した。

翔平『食えよ。くわねーと明日動けないぞ。』

霧島『うん、ありがとう』

一通り食べたなら、俺はカバンから布団を出した。

翔平『これかけて寝ろ。お前は雪の中で埋まっていたから体温が下がっているんだ。』

霧島『えっ、でも・・・』

翔平『俺はいいんだ。寒さとか強いし。』

ハックション！思わずくしゃみをしてしまった。だが俺は気にせず横になった。

翔平『お休み』

寝ようとしたとき、霧島が俺な横に来て、俺にも布団をかけた。

霧島『・・・となり、いいかな』

翔平『好きにしろ。』

霧島『・・・ありがとう、おやすみ』

そして霧島はすぐに眠りに付いた。俺は寝返って霧島の顔を見た。  
・・・可愛い俺は改めてそう思った。

夜は明け、吹雪もやんだ。俺と霧島は合宿先に付いたのは、9時37分のこと。

\*\*\*\*\*

目が覚めた。今日がAクラスとの戦争の日。今日のためにがんばってきたんだ。

・・・なんとかなるさ！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2575x/>

---

風都国立大学付属高等学校（仮）

2011年11月26日18時57分発行